

歌、奏でし戦姫と花咲く勇者

アウス・ハーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじ

パヴァリア光明結社による神の力の顕現。

それらを阻止したシンフォギア装者たちの元に遂にこの世界の創造主、カストディアンが降臨する。

カストディアンの尖兵たちとの戦いの中、シンフォギアを纏いし装者たちは次々に倒れ、遂に残りはただ1人。

立花響だけとなる。

立花響の親友、小日向未来は彼女を助けるため、かつて並行世界より手にしたシンフォギア、『神獣鏡』を纏い戦場へと立つ。

されど、苛烈を極めるカストディアンとの戦い。2人の少女はついに最後の歌を奏で、その命の全てを燃やし尽くす。

全てが終わった。その筈だった

しかし、その2人の耳に聞こえた声。

それは、こことは違う世界、響たちの世界で言うカストディアンによってそのほとんどが滅ぼされた世界。

そこを守護する神、『神樹』の言葉であった。

「私たちの世界を救ってほしい」

神樹はそう響と未来に告げるのだった。

※本作は『戦姫絶唱シンフォギア』と『結城友奈は勇者である』のクロスオーバー小説となります。

※シンフォギアサイドはA X Z終了後。ある理由により響たちがゆゆゆの世界へ転生するといった形となります。

※シンフォギアサイドの登場人物は響と未来、加えて翼、クリスの基本4人（増える予定あり）

※ゆゆゆ側は第1期の少し前からのスタート。基本原作準拠ですが、本作独自の展開も盛り込む予定となっております。

※独自解釈、世界観設定、原作改変などもあります。

目次

プロローグ

序章1話	世界を照らす、2人の歌姫	1
序章2話	救われたモノ、失われたモノ、残されたモノ	6
序章3話	邂逅する者たち	10
第1章	花咲く勇氣の花	
第1章1話	始まりと出会い	18
第1章2話	美しき森の小さなひだまり	29
第1章3話	勇者部の少女	42
第1章4話	BAYONET CHARGE 前編	49
第1章5話	BAYONET CHARGE 後編	58
第1章6話	FLOWER	66
第1章7話	始まりの時	78

プロローグ

序章1話 世界を照らす、2人の歌姫

パヴァリア光明結社により引き起こされた一連の事態。

『神の力』。不完全なる人々を、完全たる存在である自らが支配しようとはあまりにも壮大なそれを手にしようと思んだパヴァリア光明結社、統制局長アダム・ヴァイスアフト。

人類を支配より開放するという理想に邁進するも、最後は今を生きる人々を守り抜くために、その命を燃やしたサンジェルマン、プレラーティ、カリオストロら錬金術師たち。

多くを失うも守り抜かれた人々に日常。

それを生き抜いた戦姫たちを訪れたのは東の間の平穏。

季節は夏から、本格的に秋へと向かっている。

山々は紅葉で彩られ、そこに暮らす生き物たちは、来るべき冬に向け必死に生き抜いている。

人々もまた、それは変わらない。

しかし、その平穩は長くは続かなかつた。

季節が秋から冬へと変わる節目。

それは突如、人々を襲つた。

それは、あまりにも不気味なほどに白く、そして巨大であつた。
それは天より下りて来た。次々に天より下りてはありとあらゆるものを破壊していった。

それは、巨大な口のようなものを持っていた。人々は次々にそのそれらにより喰らい殺された。

そしてそれは、人々の英知の結晶たる、ありとあらゆる現代兵器。その全てを無意味な物とした。

ただ一つ、それらに対抗できたのは。

世界を幾度となく救つてきた歌う戦姫たち。

彼女たちだけであつた。

彼女たちは人々の安寧を守り抜くために、その点より下りし者たちと戦つた。

血を吐きながらも歌を歌い続け、神話の時代より受け継がれた武具をその手に。

しかし、あまりにも強大なそれらに対し――。

一人、また一人と歌姫たちは倒れていった。

蒼き歌姫はこう言った。

「人々を護るが防人の務め、その生き様、その身に焼き付けろ！」
紅き歌姫はこう言った。

「こんな世界、どうにもならねえことも沢山ある。だがそれでも、パパとママが観たかった夢。それを叶える為ならば！」

絶望に満ちてしまった世界。それでも歌姫たちは歌い続け――

戦い続けた。

そして、ついに歌姫はたった1人となってしまうた。
しかし、その歌姫を助けんと、新たな歌姫がまた1人生まれた。
それはその歌姫とは、たった1人残った歌姫の。

暖かく優しいヒダマリ。

「ごめん未来……未来までこんなことに巻き込んで……」

黄金色の鎧をまといし歌姫は、申し訳なさそうに銀と紫の鎧を纏いし歌姫にそう告げる。

「そんなことない、それに私は約束したから。絶対に響と繋いだ手を離さないって」

しかし、銀と紫の鎧を纏う歌姫は、そう黄金色の歌姫に答えた。

2人が見上げた空の先、そこにいたのは数えきれないほどの絶望。それでも、残された2人の歌姫たちは決意に満ちたその顔でまっすぐにそれらを見据えていた。

互いの存在を強く握りしめ、2人の歌姫は最後の歌を奏でていく。

金色に、或いは白銀に光り輝く2人の歌姫。

「ありがとう未来、最後の時、こうしてそばにいてくれて」

「ううん、私の方こそありがとう響、最後に一緒に歌ってくれて」

そして2人の歌姫は、絶望へと飛翔する。

「これが——」

「私たちの——」

「シンフォギアだあああああああああ
!!!!!!」

最後に見えたのは、絶望で黒く染められた世界を照らす。

眩い陽の光であった。

世界は……人々は確かに救われた。

血を吐き命を燃やしながらも歌い、そして戦った歌姫たちによって。

序章2話 救われたモノ、失われたモノ、残されたモノ

立花響と小日向未来、たった2人になった歌う戦姫。

彼女たちは世界と、そこに住まう人々の日常を守り抜くために、命を燃やす歌を歌った。

最後のその時まで、彼女たちは互いの存在を握り締め、決して離すことはなかったという。

絶刀天羽々斬、魔弓イチイバル、銀腕アガートラム、ザババの2振りの刃、シユルシャガナとイガリマ、そして神獣鏡と無双の一振りガングニール。

7つの聖遺物の力と、風鳴家が解放したレイラインより与えられた神々の力、それらを纏った2人の少女たちの活躍によりカストディアン
の尖兵たちは退けられ、人々は再び平穏を勝ち取るに至る。

しかし、その為に払った犠牲は大きく、日本国政府いや、この世界はたった7人しかない装者と、シンフォギアという剣を失う事となった。

戦いの後、超常現象災害対策機動部、タスクフォースS・O・N・Gの下にどこからともなく何かしらのメッセージが届けられた。

そのメッセージは、彼らにとって衝撃的なものであると同時に、この世界の未来が繋がった証でもあった。

日本国政府とS・O・N・Gは直ちにこのメッセージを全世界に公表することとなり、そのメッセージにはこう書かれていたという。
『我等はカストディアン、お前たちルルアメルがそう呼ぶ者たち。此度の戦、見事我らが尖兵を打ち破った。

されど、今お前たちが持ちうる力は、決してお前たち人が持つて良きものではない。それは何れ、この世界に真の災いを起こすこととなるであろう。

我らは此度の戦により、お前たちの強さと気高さと、そして力強さを知った。その報償とし、この地をお前たちの好きにすることを許そう。されどその条件とし、今のお前たちルルアメルが持つ異端技術（ブラックアート）のその全てを放棄することを望む。

これは、後の世に手この世界が新たな禍にさらされぬための、唯一の道だ。如何か、そなた等ルルアメルの進むべき道に、光あらんことを』

文章それ自体は、カストディアンの尖兵を打ち破ったことをたたえるような文面であったものの、それはどこか、今の自分たちが持つ異端技術を放棄せねば再び自分たちは人類に牙を剥くという、ある種の圧力を感じるようなものでもあった。

世界各国はこのことを受け、緊急の安全保障理事会を開く。

しかし、カストディアンの襲来が最も激しかった米国をはじめとした主要三大国家は出席を見送ると同時に、早々に異端技術の放棄を表明した。

最初はこの3か国が率先して異端技術の放棄を表明したことに疑問や不信感を募らせる国も少なくなかったが、その理由が分かるにつれ、各国もそれに追従することとなった。

そして、その中には、最も異端技術研究が進んでいた、事実上の先進国、日本も含まれていた。

それから、この世界の時は静かに過ぎていき、シンフォギアやノイズ、特異災害や異端技術という言葉はその多くが現実味を失い歴史の中でのみ語られるものとなっていった。

されど、それでもこの世界を救った英雄たちの事は、人々の成長の中で聞かされる御伽話としてこの世界の人類の歴史が終わるその時まで、人々の間で語り継がれた。

そして、人々の間で長年受け継がれたある英雄の名があった。

人類存亡をかけた最前線、その中で最後の1人となるまで戦い続けた英雄、その名はこう呼ばれた。

『立花響』と……………。

「これがこの世界が辿った道なのですね」

「ああ……………どうだ◆◆よ。これを聞いた感想は」

どこかもしれぬ世界。2人の女性がその世界が終焉を迎えるまでの日々を見守っていた。

「……………とても悲しい世界だと思いました」

「そうか……………」

「でも、最後のその時まで、人々は希望を失わず、生き続けた。とても強い命に支えられた世界。そう感じました」

「そうか……………ならば、私やあの子たちの頑張りも、報われたと思っていいいのかもしれないな」

一人の女性がこの世界のことについて述べ、それを聞いたもう片方の女性は、どこか感慨深そうに頷いた。

「では◆◆、あの子たちの事は頼むわね」

「はい、しかし◆◆◆◆、貴方はこちらに来ないのですか？」

「ええ、だってそうでしょ？ 何千年も悪者やってきたのよ？ なの

に今更どの面下げて正義の味方なんてやれるの？ 何より、その世界を救えるのは、その世界で今日を生きる者たちしかないわ」

「◆◆◆……………」

「そんな顔しないで、これはずっと前から、私自身が決めていたことよ。いつかの未来なんて、亡霊が言葉にしているものではないわ」

「そう言い残すと、もう片方の女性は光の粒子となって、その場からいなくなった。」

「今日を生きる者たち……そうかもしれないね」

「残された女性は、最後にもう片方の女性が紡いだ言葉を繰り返していた。」

「だからこそ、これ以外の道は……ありませんでした。貴方の世界の英雄たちの魂、確かに受け取りました」

すると、残された方の女性の手のひらにいくつかの光の球体が現れる。

「確かに託されました。そして、貴方のいた世界のように、未来へと繋がられる世界に見せます」

「だからどうか見守っててくださいね、フィーネ」

そして、残された方の女性もまた、その世界から姿を消すのであった。

可能性を紡ぐ、そのために。

序章3話 邂逅する者たち

そこは、目映いばかりの場所だった。

色とりどりの樹木が生い茂る、まさしく異界と呼ぶにふさわしいそんな場所。

その中で、ひとときわ大きくそびえ立つ大樹、その根本の付近で世界を救った英雄、立花響が眠っていた。その傍らには、彼女の親友にしてひだまり小日向未来の姿もある。

「あれ……私……」

立花響は、ゆつくりと瞼を開け起き上がる。

「ここは……私は……一体」

まだ完全に覚醒しきっていない中、響は周囲を見渡す。すると突如、響の頭の中にこれまで彼女が経験してきたすべての光景が、濁流のごとく押し寄せて来た。

思わず頭を抱える響。

「ッ!? そうだ……私……私、あの時未来と一緒に、絶唱を……」

思い出した途端、体中に震えが走り、響の顔はどんと青ざめていく。

「そうだ、未来!」

響は思い出したかのように、親友の名前を呼ぶ、幸い親友の未来はすぐそばにいた。見たところ外傷のようなものも見受けられない。

そのことで響はホッと肩をなでおろした。

「未来、起きて未来」

「う……響……?」

響は未来を軽く揺さぶり彼女を起こすと、再び周囲を見回した。

未来も響に手を貸してもらい隣に立って同じく周囲を見回す。

「ねえ、未来。ここって一体、確か私たちは——」

「うん、あの最後の戦いの時に絶唱を2人で歌って……」

響と未来は、なぜ今自分たちがこのような場所にいるのか見当がつかなかった。

自分たちはあの時、あの場所で自らの命、その全てを燃やしてしまっただけから。

「ここって、もしかして天国……なのかな？」

「そうなのかな……」

『いえ、そのような場所ではございません』

すると突如、2人の脳裏に何者かの声が響き渡った。驚き響と未来の2人は周囲を見渡す。

「誰!?! 一体どこから!?!」

周囲を見渡しても人影のようなものは見受けられない。しかし、この女性のものと思われる声は今も響たちの頭の中に響いている。

『こちらです』

すると、先ほどよりもはつきりとした声が耳に入ってきた。その声を頼りに響はもう一度周囲を見渡すと、響と未来の2人の前には、あまりにも巨大な大樹が聳え立っていた。

それは先程見渡した時にはなかったもの。

『私の声が、聞こえますか?』

「もしかしてこの声……この樹から!?!」

「樹が喋るなんて……」

先程の女性の声が、今一度響と未来の耳に響く。どうやらこの声は目の前のこの大樹から発せられているようであった。あまりにも非常識極まりない光景に一瞬言葉を失うものの、すぐに平静を取り戻す響と未来。そうなれたのは元々の世界でいくつもの未知の存在と出会ってきたからに他ならない。

「貴方は……一体」

『驚かせて申し訳ありません。私の名は神樹と申します。とある世界で人々を護る神として崇められ、祀られております』

「神様……なんですか?」

この大樹は自らを『神樹』と名乗る。

『はい、こちらにあなた方2人をお呼びしたのは、あなた方2人をお願いするためののです』

「お願い……ですか?」

神樹はそう響たちに告げると、自らが響と未来の2人をこの場所に詠んだ理由と、自らが言ったお願いしたいことを告げた。

『今、私たちの世界は、とある存在により危機に瀕しております。そして、ここ最近になってからです。新たな敵が我々の世界に現れ、我々の世界を滅ぼそうとしているのです』

「新しい敵？」

『はい、それはこの世界に存在していた者によく似た存在……いえ、全くの同一のものと呼べる者たちです』

「もしかして……それって」

響と未来の2人は神樹の言った敵に関して心当たりがあった。

『はい、こちらの世界で言う「ノイズ」と呼ばれる存在です』

ノイズ、それは響たちの世界に存在していた人類の敵。正確には古代の人々が、自分たち以外の存在を殺すために生み出した同胞殺しの魔物。

太古の時代より神話や伝承の中で描かれた魑魅魍魎の類、その多くがこのノイズであったともいわれていたほど、響たちの世界ではなじみの深い存在であった。

『私たちの世界では、西暦の時に襲来した人類の天敵「バーテックス」との戦いの最中にあり、そのバーテックスに対しては対抗するための術があるのですが、この「ノイズ」に関しては一切の対抗手段を持っておりません。このままでは私たちの世界の脅威であるバーテックスとこのノイズにより、滅ぼされてしまうでしょう。よって、それを回避するためにあなた方の力をお借りしたいのです』

神樹のお願い。それは神樹の世界で現れたノイズに対抗するために、響と未来に力を貸してほしいというものであった。

しかし、それを理解しても未来、それどころか響もこのお願いを聞くべきか悩む。

「手を貸してあげたいのはやまやまですけど、私たちに出来ることなんて、たぶんそんなにありません」

「未来の言うとおりです。私たちの世界だって、ノイズと戦えたのはシンフォギアがあったからで、それもないんだと私たちに出来ること

なんて……」

元から、響たちのいた世界でも、シンフォギアという異端技術に関する知識、技術があり、それを武器と出来たからこそ『ノイズ』に對抗できたに過ぎない。

しかし、神樹のいる世界にはそういったものはない。そうならば響と未来にできることなどどれだけあるというのだろうか。

『そのことに関しては心配いりません。こちらであなた方が使っていた力に関しては、ある手段を用いそちらでも利用できるように致します。そして、私たちの世界に来ていただくのは、あなた方だけではありません』

神樹は響たちが響たちの世界で使っていた力を自分の世界で利用できるようにするという。更に響たち以外にも神樹のいる世界へ迎え入れるものたちがいることを告げる。

「私たち以外に？」

響がそう呟くと同時に、響と未来の2人の前に紅と蒼の光の球体が降り立ち、それが人の姿となる。

「ッ!? 翼さん!?!」

「クリス!?!」

人の形になった光の球体、その姿はかつての響、未来が見知った人物であった。

「久しいな立花、小日向も」

「事情は、ここにいる神樹つてのからある程度聞いている。私らも驚いてはいるが、放つても置けねえ内容だ」

「じゃあ、2人は……」

「ああ、ここにいる神樹とやらの頼みを聞こうと思っている」

目の前に現れたかつての友、風鳴翼と雪音クリスは、既に神樹からの願いを聞こうと心に決めていた。2人の言うとおり、確かに放つても置けない内容であり、響と未来も出来ることなら聞いてあげたいと思っている。

しかし、全くの未知の世界なうえ、自分たちのいた世界で使っていた手段が取れるかはまだはつきりとしていない。神樹の言葉全てを

信じきれないでいた。

だが――。

「私、行きますー!」

「響!?!」

響は少し考えた後そう口にした。

「本当だったら、私も未来もあの時いなくなっていたはずだった。でも、もしまだ私たちに出来ることがあるって言うのなら、それをどうにかしたい」

「響……」

「だから、私は行く!」

響はどうやら決心がついたようだった。もとより誰かのためになることをしたい、人助けが自身の趣味とすら言っていた彼女だ。この神樹のお願いに関しても出来ることなら聞いてあげたいと思っていた。

「響がいくのなら、私も行く」

「未来……」

「言ったでしょ、響と繋いだ手は、絶対に離さないって」

「ありがとう、未来」

響の決意に未来も続いた。あの日フロンティアでの戦いの後から未来は心に決めていたのだ。響と繋いだこの手は決して離さない。どんな世界でも彼女の陽だまりであり続けると。

「決まりだな」

「ああ、こちらは問題ない。それで、どうやってそちらに向かう?」

『はい、今回あなた方には「転生」という方法にて私たちの世界に来ていただきます』

「転生とは、「輪廻転生」という事か?」

『はい、本来異なる世界と世界、それらを行き来することは出来ないません。唯一の例外があなたの方の世界にはありました。それも今のあなた方には……命を終えた者であるあなた方に使う事は出来ないません』
「ギャラルホルン……」

神樹が言った例外に関して響たちは心当たりがあった。夏休みに

入ったときのある程度の期間、響たちがかかわっていたとある事件にて旧2課が保有していたあつる聖遺物。それには異なる世界同士を繋ぐ力、即ち並行世界を渡る力があつた。

しかし、元居た世界ですでに命を終えた響たちにそれを使う事はできない。

そのため、唯一残された世界を渡る方法は神樹の言う『転生』しかなかったのだ。

『しかし転生を行えば、元々いた世界においてあなた方は完全に死を迎えることになり、恐らく元居た世界に戻ることはできないでしょう』

響たちは神樹のその言葉に一切動じることなく耳を傾ける。

『申し訳ありません。これ以外にないんです。この方法以外で、私たちの世界に来ていただくことは——』

「そんなこと、今更どうってことねえよ」

神樹は申し訳なさそうに響たちに告げるが、それを遮るようにクリスが言葉を発した。

「ああ、既に元の世界で命を終えた身。それが再び生きる意味と理由を与えてくれたのだ。感謝ことすれど、それに恨み言を言う理由はない」

翼もクリスに続く。そして響と未来も。

「貴方がいなかったら、私たちはこのままどこからもいなくなってた」「私たちに、もう一度生きる理由を与えてくれたんだもん。だから、そんなこと言わないで」

『皆さん……』

響たち4人の心はすでに決まっている。既に元居た世界では命を終えた身、このまま消えるよりも神樹の願いを聞き転生し神樹の世界に行くのも悪くはない。

その4人の覚悟と決意を目にし、神樹も決断を下した。

『分かりました。それでは転生を用い、あなた方4人を私たちの世界へお送りいたします。あなた方が使っていた力に關してですが、私たちの世界にも似たような力があり、それを応用することで使用可能な

ように致します』

4人の転生のため、神樹が最後の準備を始めた。そして、4人にあるモノを渡す。それは響や未来たちもよく使う機器、いわゆるスマホの形をした端末であった。

『転生した後はその端末で私たちの世界での事をご確認ください。それと、こちらの世界での記憶はそのまま引き継がれますので、立ち振る舞いには細心の注意を払ってください。それと……これは私の我儘でもあります。どうか、私たちの世界の事を、私たちの世界の「勇者」たちの事を、あなた方の人生に幸があることをお願いします』

そう告げると、周囲の輝きが一層強くなり。

同時に響たちは意識を手放した。最後に神樹が言った『勇者』という言葉。それだけが心に引っかかった。

「響さんたち、先に行ってしまいましたね」

『はい、彼女の言うとおり、とてもとても強い意志と魂をお持ちでした』

「はい、そのおかげで僕も救われましたから」

誰もいなくなつた輝く空間で、一人の女性と小さな少年とも取れる少女が話をしていた。

「本当は、直接お話がしたかったのですが、それはまたの機会になつてしまいました」

『申し訳ありません』

「謝らないでください。別に怒ってるわけじゃありませんから。それに、僕ももう行かないと」

『はい、それではあなたも。どうか私たちの世界をお願いしますね』
「任せてください」

そういうと、少年のような小さな少女の体が眩く光り輝き。

その空間から姿を消すのであつた。

第1章 花咲く勇気の花

第1章1話 始まりと出会い

四国、讃州市のとある一軒家。そこにある一室にて一人の少女、栗色の雛を想わせる独特の髪型をした『立花響』という名の少女が目覚めます。

まだ完全に覚醒しきっていない中で彼女はここまでの間に起きたことを思い出していた。

「本当に……転生したんだ」

先の空間にて神樹に言われたこと、今だに完璧には信じきれなかったことだが、こうして自らに起きたことを理解していくうちに、紛れもない真実だと響は確信した。

「アレ？ 私って、こんな……いや、本当にちっちゃくなってる!」
ふと、窓に反射して映った自分の姿に驚く。それもそのはずだ、転生前の響は自ら曰く麗しい女子高生であった。しかし今こうして映る自分の姿はそれとは比べようがないほどに幼い外見であったのだ。そういえば、ベッドから起き上がったとき、妙に視線が低く感じたようなと、起きてすぐに感じた違和感を響は思い出す。

「これじゃ私、小学生だよ……」
こう言ってはなんだが、今の響の年齢はまごう事なき小学生である。

響が自分自身の姿に若干落胆していると、突如響の部屋の中で電音が響き渡った。音がした方向に目をやると、あの不思議な空間で神樹から渡されたものと、寸分違わぬデザインのスマートフォンが置かれていた。

「わわっ!？」

突然の事で響は驚き尻もちをついてしまう。

「響く起きてるの？ それに何、今の音？」

あまりにも大きな音だったのか、下の階にいたであろう母親の声が聞こえて来た。そのことで響はハツとなる。

(そうか……この世界にも、私の家族がいるんだ……)

「ううん、大丈夫だよ。携帯のアラームが鳴って驚いてちよつと尻もち付いちやっただけだから！」

「もう、気を付けなさいよね響。ただでさえ貴方はそそっかしいんだから」

「う……うん」

(こっちの私も結構そそっかしいんだ……まあ、私だから当然なんだけど)

母親からの指摘の声に苦笑いを浮かべる響。

「起きているのなら早く下りて、朝ごはん食べちゃいなさい。今日はお隣の結城さんのお家に、引越しの挨拶に行くんだから」

それだけ告げると母親はどうやら台所に向かったらしい。

響はそれを確認すると、すぐさまスマホを手に取り画面を確認する。

スマホには、恐らく同じように転生したであろう親友の未来からメールが入っていた。

【立花響様

この端末を起動されたということは、転生はうまくいったという事です。先程未来さま、翼さま、クリス様の端末も起動されたのを確認しました。現在、この御三方はこの世界のある組織にかかわっております。連絡は双方で取れるよう配慮いたしますので、何かあった際はご利用ください。

尚、転生なされた際にお体が小さくなられておられることにお気づきでしょうか、それはこれから出会う方々の年齢に合わせた形の処置でございます。響様はじめ、こちらの世界に転生をなされた方々にはそれぞれにお役目を与えております。

響さまがたは先の世界にて『シンフォギア』なる力を使っておられ、その力はこちらでも使えるよう配慮いたしました。ですがまだその力を整備するための設備等は構築できておりませんので、扱いには十分注意してください」

メールは神樹からであった。神樹からのメッセージの内容に再び

驚く響。ふとスマホの置いてあった机の上を見ると、見知った紅色の結晶状のペンダントが置かれていた。

「この世界でもシンフォギアを使えるんだ……」

響は元の世界で使っていたシンフォギア『ガングニール』を手に取ると再びスマホのメッセージを確認する。

「響さまがお役目に付くまでにはまだかなりの期間がありますが、その間にどのような事態が引き起こされるかは、私にも断言することはできません。よって響様にも事が起きるまで、あるお役目を担っていただきたいのです。」

それは、今響さまがおられるところ。これから響さまがお会いになる女の子を、来るべき時まで守り抜いてほしいのです。

重ねてお伝えいたしますが、どうかあなた方の新たな人生に、幸有らんことを」

響はメッセージを読み終わると、早速スマホの中にある情報に目を通した。

スマホの中には、この世界での自分の経歴やこの世界の成り立ちなどが事細かに記されていた。響は早速スマホの中にあつた親友、未来へと確認の電話をかける。

「もしもし、未来？」

《響!?! てことは響も無事転生で来たんだね》

未来はすぐに電話に出てくれた。さすがは親友だと響は関心する。

「うん、無事出来たよ。それで、未来は今どこにいるの？」

《ここから少し離れた街にいるよ。車で1時間くらいかかるから、中々会えないんだけどね。後、翼さんとクリスからも連絡があつたよ。2人は今この世界で神樹様を祀ってる組織に関わってて、そこで色々お役目を果たしているんだって。私も神樹様の巫女って事でお役目について、今は自由に会いに行くことは出来そうにないんだ》

「え!?! 未来が巫女さん!?!」

《うん……ほら、私も元の世界で神の力の器になれるって言われてたでしょ? 神樹様が言うにはそれが影響してるんだらうって。私の方にはシンフォギアがなかったから、一緒に戦うことはできないみたい

だけど……」

「少しだけ未来の声に影が差したのが感じ取れた。しかし、響としては未来が戦場のような危ないところに来ることがないとわかり少しだけ安堵している。」

「そっか、未来も翼さんもクリスちゃんも結構大変だね」

「うん、だからごめんね響、しばらくは一人で何とかしてね。何かあったら互いに連絡を取ろう。あ、もう行かないと。それじゃまたね響」
「うん！ またね未来、頑張って」

電話を終えると丁度母親から早く起きて朝ご飯を食べなさいと催促が来た。お腹も減っていたので響は手早く寝間着から私服に着替え1階へと降りていく。

「ごめんなさいお母さん！ 朝ごはんちやちやつと食べちゃ……」

「もう遅いわよ響。起きてるなら早くしなさいね」

「まあまあ母さん、響にとってはせっかくの御休みなんだから」

「そうだよ、ほら響、ご飯をお食べ」

「貴方とお母さんは響に甘いのよ！ この子、普段からそそっかしいんだから……て、どうしたの響？」

「え？」

この世界での自分の家族の姿を見て、一瞬言葉を失い立ち尽くしてしまう。それを気にした母親から声を掛けられ咄嗟に響は我に返った。

「な……何でもないよ！ あくお腹すいたなあく朝ごはん速く食べないとー」

（ここまでやるなんて……）

響が言葉を失い立ち尽くしてしまったのには理由があった。

響と共にいま朝食を摂る響の両親ともう1人、響の祖母。彼らの姿は元々響がいた世界の両親、祖母と全くと言っていいほど瓜二つであったのだ。

家族と一緒に朝食を摂り始める響はふと元居た世界の事を思い出してしまった。

（最後にお母さんやお父さん、お祖母ちゃんと会ったのって何時だった

たんだらう……アレからずつと戦いだつたから……きつと、すぐく心配させて、悲しませちやつたんだらうな……)

朝食を済ませると早速響たち、立花一家はお隣の結城一家に挨拶に向かった。

「どうも、先日引越してきた立花です」

「結城です、ようこそこの町へ」

響の父親がお隣の結城家のご主人に引越しの挨拶を行う。結城家のご主人も同じように挨拶を返した。

結城家のご主人は武道の有段者らしく、その体はなかなか鍛えられた筋肉質でどことなく響がもとの世界で戦い方などを師事していた『風鳴弦十郎』を彷彿とさせた。

実際、結構豪放な感じの人物のようである。

「立ち話もなんですし、どうぞ中へお入りください」

結城家のご主人に促される形で響たちは結城家へと入っていく。

「お父さん、来たよ。あ、こんにちは！」

居間に通されしばらくすると一人の女の子がやってきた。

「やあ友奈、こちらお隣に引越してきた立花さんだ」

結城家のご主人はそう居間にやってきた女の子に告げ自分の隣に招き座らせた。

「立花です、娘さんですか？」

「ええ、丁度響ちゃんと同い年ですかね」

「そうなんですか、ほら響も挨拶」

「あ、うん！ 立花響です」

「私、結城友奈。よろしくね響ちゃん」

響がやってきた友奈と呼ばれた女の子に挨拶をすると、相手の女の子も、まるで天真爛漫を絵にかいたような笑顔で響に挨拶を返した。

それからしばらくは響も友奈も2人とも静かに両親の話を傍で聞いていた。話の内容はどちらも子供である友奈や響にはさほど重要なものと呼べない世間話であったが、どちらも親の事を考え静かに聞

いていた。

しかし、こういった時間はさすがに子供に身には退屈でもある。

「そうだ響、せっかくだし友奈ちゃんにこの町を案内してもらったらどうだ？」

「え!？」

「ああ、それが良い! 友奈、響ちゃんにこの町の事を紹介してあげなさい。何も大人の退屈な世間話なんかにつき合う必要はないんだ」

「良いの!？」

それを察したのか、響と友奈の父親はそう響、友奈の2人に告げた。正直両方の父親の指摘通り、響も友奈も流石に暇を持って余していたところなので、この両家の父親の言葉はありがたい限りであった。

「それじゃ、響ちゃんとちよつとお出かけしてくるね。響ちゃん、行くか」

「うん! お父さんありがとうね」

響、友奈両方の父親から許可をもらい、響と友奈は一緒に出かけることとなった。そんな2人の姿を立花、結城家両方の親たちは微笑ましくそうに見送るのだった。

お互いの両親から許可をもらい、友奈と響は今街の商店街にやってきていた。

「ここが商店街だよ。私はこの街中の雰囲気大好きなんだ」

友奈に案内される形で響も商店街を散策していく。元々いた世界でも響たちのいたりディアン近くにはこのような商店街が広がっていたのだが、そちらはかなりの近代化がなされ、町中の至る所に電子掲示板などが置かれていた。最も響の実家のある地域は、この讚州市にどこか近い雰囲気であったが、そちらはあまりいい思い出はなかった。

「どう響ちゃん?」

「あ、うん、色々わかりやすく教えてくれてありがとうね。でも結構友奈ちゃん詳しいね」

「えへへ、結構友達と街に出たりとかしてるんだ」

響が最初感じた友奈の印象は、年相応の天真爛漫さがあり、他人を放っておく事ができないといった感じの明るく元気で優しい女の子といったものであった。

響も本来は口数が多い、というか周りからやかましいと言われるほど元気な性格ではあるのだが、一方で元の世界で起きたとある事件の事もあってか、どこか歪な感じの内罰意識、救済意識のようなものを持っていた。

しかし、それを除けば年相応な快活さのある少女であり、友奈ともすぐに打ち解けられた。

友奈と響は町を散策しながら、お互いにいろいろなことを話した。友奈からは町の紹介のほか、仲のいい友達の事や学校での事、そして家族との暮らしのことなど。

響も一番大切な親友の事や、憧れの先輩のこと、家族や友人（もちろん元の世界のことはぼかしながら）のことなどいろいろと友奈に語った。

「なんか、響ちゃん見たると、他人って気がしないなあ」

「そうだね友奈ちゃん、私も同じこと考えてた」

そんなこんなで互いに楽しそうに話しながら案内は続く。

だがそんな2人の前を突如、何やら黒い塵のようなものが横切った。

「何？ この灰みたいなの」

「ッ!？」

友奈は突然自分の前を舞った黒い灰のようなものに首をかしげることが、響はそれを見た瞬間、その表情が険しいものに変わった。

「ちよつと、響ちゃん!？」

次の瞬間、響は友奈に見向きもせず駆けだした。

（そんな、こんな時に、なんで!）

響は、先ほど自分と友奈の前を横切った黒い灰に心当たりがあつ

た。

それは、響が元居た世界で、誰もが知る絶望。それが現れる前触れ。しばらく商店街内を走り続けた響は、やっと先程舞った黒い灰の発生源を見つけた。

「そんな……」

響がそこで観たのは、既に真っ黒な唯の灰の塊となってしまうた人々の無残な姿であった。

「やっぱり、これは……」

「響ちゃん！」

するとそこへ息を切らしながら友奈が追い付いて来た。

「一体どうしたの響ちゃん……て、何……これ……」

響も目の前に広がる凄惨な光景に息をのむ。

「友奈ちゃん……今すぐここから離れるんだ……」

響は、先ほどまで友奈が聞いていたのとはまるで違う、静かな、しかし鬼気迫るような感じの声色で友奈にそう言う。

「え？ 響ちゃ……」

「早く!!」

響は友奈が答えるよりも先に彼女の手を取り、一目散にその場から逃げ出す。

だが、時すでに遅く先程の灰と化した人々の周辺から、無数の半透明な異形たちが地面から滲み出るように姿を現した。

「な……なんなのアレ!」

「今は黙って走って!!」

響はその異形たちを確認すると、逃げるスピードを上げる。響はその異形たちに見覚えがあった。忘れるわけもない。それは響が元居た世界では、教科書で題材になるほど知れ渡った存在。その名は特異災害『ノイズ』。どこからともなく現れ、人々を物言わぬ炭素に換える災厄だ。

来た道を走りノイズたちとの距離を開く響と友奈の2人だが、突如ノイズたちは体を鏃状に換え、2人に向かって突進してきた。

響は友奈を抱き寄せると路地の方へと飛びそれを躲す。

そして今度はその路地をまっすぐ友奈の手を引きながら走る。元の世界で分かっていたことだが、ノイズは一度狙った獲物を簡単に逃すような輩ではない。それこそ狙いを定めれば地の果てまでも追ってくる執拗さを併せ持っていた。事実、今もその異形たちは響と友奈を追ってきている。

元の世界でならすぐにシエルターへ友奈と共にいるところだが、この世界にそんなものはなく事実こうして走っていてもそれへ繋がる入口すら見つけられない。

走りながら、響は転生前に神樹が言った言葉を思い出していた。

（やっぱり、この世界の人は誰もノイズを知らないんだ！ でも、ここでギアを纏うわけにも……でもそれじゃ、それに——）

この世界で、ノイズが現れたことは西暦の時代からこれまで一度もなかった。故に街中のどこにも、元居た世界で当たり前にあったシエルターの入り口はなく、ノイズが現れているというのに、街のだれ一人逃げようとはしていない。

しかし、先ほど現れたノイズたちは、そんな当たり前の日常を送っていた人々にも、容赦なく襲い掛かる。

「なんだ、こいつらは……ッ！」

「うわああああ、体が、体があああああ!!」

先程まで活気に満ち溢れていた商店街は、その瞬間、地獄に代わる。ノイズたちは響を追いながらも、普段と変わらない日常を送っていた人々に容赦なく襲い掛かり、襲われた者たちはその全てが灰となって崩れ落ちる。

「人が……灰に……」

「くッ！」

その光景に友奈は絶句し響は苦虫を噛み潰したような顔になる。

しかし、戦う力を持たない今の少女たちには何もできない。生き残るために逃げる以外には。

だが、運命はそれよりも残酷であった。

「響ちゃん、前！」

「はッ！」

ノイズたちはあろうことか、響と友奈の前にまで現れた。完全に囲まれ退路を失ってしまう響たち。

「響ちゃん……」

「大丈夫だよ友奈ちゃん……」

口ではそう友奈を励ます響だが、響自身どうすればこの状況を切り抜けられるか。妙案などなかった。

(今の私に、シンフォギアが使えたら……でも！)

『諦めてはなりません、響さま！』

全てをあきらめた。諦めようとしていたその時、突如響の頭の中に声のようなものが響き渡った。

その声に響は聞き覚えがあった。

(神樹!?)

『響さま、どうか勇気を、胸の歌を信じてください。そうすれば、それは響さんの思いに、きつと答えてくれます!! ですからどうか!』

それは転生前に聞いた。この世界の守り神である神樹の声。

「胸の歌……そうだ、まだ終わらない……胸の歌がある限り、諦めちゃダメなんだ。出来ること、私に出来ることが今、ここにあるのなら!!」

「響ちゃん……」

友奈は目をつむり響にしがみつく。

ノイズたちはついに響たちに向かって、その毒牙を剥いて来た。

♪喪失までのカウントダウン

その瞬間、周囲に煌びやかな歌が流れ渡る。それと同時に友奈が感じたのは温かな温もりであった。

「……………響ちゃん?」

恐る恐る友奈は目を開ける。するとそこに映ったのは、まるで陽の光のように、金色に輝く響と、自分たちに襲い掛かったはずの、先ほど見た人々のように真っ黒な灰へと姿を変じたノイズたちの姿。

「友奈ちゃん、大丈夫だよ。絶対にコイツ等に手出しはさせない。友奈ちゃんを傷つけたりなんかさせないから!」

その目は、先ほどまでとは違うもの、元の世界での彼女が持っていた戦士の眼差し。

「絶対に、守るから。だから——」

『生きるのをあきらめないで!!』

元の世界で、幾度となく自分を救い、支えたその言葉を友奈に聞かせ、響は今一度、自分たちの命を今まさに奪わんとする絶望達と向き合う。

そして響は、この世界で最初の戦いに、身を投じるのであった。

第1章2話 美しき森の小さなひだまり

響がこの世界に転生し、ここ四国の讃州市へ引越してから早くも2年が経とうとしていた。転生して最初こそは自分の置かれた状況に色々と困惑し驚くばかりであったが、元々から環境への適応力の高い響はあつという間に慣れ、この世界での第2の人生を歩んでいる。転生してすぐに出会った少女、結城友奈とは性格が近いことなどからすぐに打ち解け、今では大親友である小日向未来に負けないほどの親友と呼べるくらいに仲良くなった。

この世界での日常において、響は何不自由することなく平和でだれの目から見ても幸せと呼べる毎を送り続けていた。

「ただいまあー！」

この世界に来てから、響はあることを日課にしている。それは朝早くに起きて町内を軽く走り込みをすることであった。

元居た世界では、誰もが呆れるほどの寝坊助で、朝に弱かった響。特異災害対策機動部2課、或いは超常現象災害対策機動部、タスクフォースS・O・N・Gに属しシンフォギア装者として戦う日々となつてからは訓練や自己鍛錬などで多少は改善されたとはいえ、それでも元居た世界でのそれは治ることがなくそのままであった。

勿論、この世界でもそれは変わらないのだが、この世界で同じく転生し、今はこの世界にて神樹を祀る組織、大赦と関わり色々頑張っている親友の未来や戦友の翼、クリス達ばかりに何もかもを任せたくはない、とはいえ今の響がこれといった特別なことができるわけでもなかったので気晴らし兼いざというときのための備えとして始めたのがこの走り込みであった。

「おかえりなさい響、よく続くわね」

「へへん！ 私だつてやるときはやるんだよ！」

最初、やると決めた時両親は目を丸くし、どうせ続かないと呆れられもしたが、結果はこの通り、この2年間響は毎日欠かすことなく朝早く起きて町内の走り込みを行っている。

そのおかげか、体の調子や身体能力は元居た世界での全盛期のそれ

に近いくらいには戻ってきたと響は実感していた。

走り込みで適度に体力を使った後ともあり、響のお腹が盛大に空腹を報せる虫を鳴らす。

「あ……アハハ、私のお腹の中の獣が暴れだしちゃったよ」

「全く、ほら早く汗を流して朝ごはん食べちゃいなさい。今日は色々大変な日なのよ?」

「え? あ、そうだった!」

母親の言葉で響は思い出す。

今日、響と川を挟んだお隣にある友奈の家の隣に、新たに引っ越してくる人たちがいるのだ。

響はそれを思い出すとすぐさまシャワーで汗を流し朝食をとり、足早に友奈の家に向かうのであった。そのあまりのスピードに両親と祖母は今一度呆れ苦笑いを浮かべるのであった。

一方の響の両親は険しい表情で今朝のテレビのニュースを見ていた。ニュースで流される映像は、無数の人のような形をした灰の山、そしてそれを処理する消防士や警察官の姿。そして、時折映る無数の異形のモノの写真。

『本日のノイズ関連のニュースです』

あの日、響が讚州市に引っ越してから数日が経った時に、世間に対しこの世界において政府以上の権限を持つ組織、大赦からある驚くべきことが発表された。

それは、響にとっては元の世界では多くの人々が知る災厄の名。

『特異災害Ⅱノイズ』に関してであった。

人を襲う異形のものたち。

襲われた人々は灰のようなものへと変わり死んでしまう事。

通常の兵器では彼らを撃退できないこと。

大赦の発表は多くの人々を困惑させ、同時に恐怖に陥れた。

「また……ノイズのこと?」

「ああ、わずかだが犠牲者が出たらしい」

「そう……」

響を見送った響の母親がニュースを見ていた響の父親に心配そう

な顔でそう聞く。響の父親は静かに今回のニュースの内容、ノイズの出現で犠牲者が出たことを告げた。

大赦はすぐさまこの世界の施政の者たち、即ち政府と連携しノイズの対策に当たっているが、状況は芳しくはない。各地でノイズ対策にシエルターなどの建造こそ始まっているモノの、このようなことはこの神世紀になってから、否、この世界の人類はほとんど経験したことがないこともあって、対策などは後手に回るものであった。

「もしかしたら、響があんなことを始めたのは、これが理由なのかもしれないな」

「そうなのでしょいか……」

響の両親は、なぜ娘が突然走り込みなどをするようになったのか。その理由はもしかしてこのことではないのかと父親の方は感じた。母親の方はそんなことはないと思いたかったのか否定的な言葉を返すが、両親の懸念は、図らずも当たっていたのだ。

響が走り込みを始めた理由は他でもなく、このノイズに係るものであったのだから。

「こんにちは響です！」

「響ちゃんいらっしやい！ 早いね」

朝食を終え早速友奈の家にお邪魔する響。友奈もどうやら朝食を終えたばかりのようで今まさに外出するところであった。

「凄いよね、この時期に2軒もお隣さんが増えるなんて」

「うん、いったい誰なんだろうね」

新しい隣人が増えるにあつて友奈も響も期待に胸を膨らませている。

「こうしてると思い出すなあ」

「何を？」

「響ちゃんが引越してきた日の事」

「あつ……」

友奈はそう何気ない感じで言うが、一方それを聞いていた響は一瞬

険しい顔になる。

あの日、響が初めて引越してきた日に起きた、あの凄惨な事件。響は友奈の言葉でそれを思い出したのだ。

遡ること、響が引越してきたあの日。

「生きるのを諦めないで!!」

引越越し先のお隣さんとなった結城家の一人娘、結城友奈に街を案内してもらっていたその時、響と友奈は響が元居た世界において、多くの人々に認識された既知の中の未知なる災害『特異災害』と呼ばれた異形の者たち、ノイズの襲撃を受けたのだ。

転生される直前、神樹からこの世界にノイズの脅威が迫っていることを聞かされた響。しかし、それでもこの世界においてシンフォギアを纏えるとはまだ確信を得ていなかった。

しかし、神樹より言われた言葉に従い、響は今再び、胸に抱いた歌を奏でその力を身に纏うのだった。

「響ちゃん……」

友奈はそう言葉を漏らすとその場にへたりこみ気を失ってしまう。それも無理のないことだった。友奈はまだ小学生のごく普通の少女でしかない。目の前で突如訳の分からない怪物が現れ、街で出会った、当たり前の日常を送っていた人々が突如、物言わぬ灰と変じる凄惨な場面を幾度となく目撃したのだ。

すでに精根全てを使い果たしていた。

「なんとか、友奈ちゃんを護らないと」

ノイズの数は見た目ほど多くはなく感じる、とはいえ、いくらガングニールのギアを纏う事が出来た響とはいえ、たった1人で相手をするには決して少ない数ではない。

ましてや気を失い身動きが取れない友奈を護りながらとなれば正直楽なものではない。

ならば、やれることは一つだけだ。

「三十六計——逃げるにしかず!!」

響は気を失った友奈を抱きかかえると、そのまま脚部にあるギアのジャツキを目いっぱい使い、一気に跳躍した。

最初にギアを纏った時は全く制御が利かずにおかしな方向へとかつと部ばかりであった響だが、今の響は元居た世界での経験と記憶がその身に沁みついていて。ギアの有り余るほどの力をうまく制御し、跳躍からの空中挙動でうまくノイズの追撃をかわし、どうにか友奈を安全な場所まで避難させることができた。

「よかった、友奈ちゃん」

友奈は静かに寝息を立てていた。そのことにほっと胸をなでおろし響は纏っていたガングニールを解除する。

「だけど……」

だが、響の表情はすぐさま暗く険しいものへと変わる。

確かに、響は友奈という一人の少女の命を護ることができた。

しかし、出現した直後に襲われた人たち、そして逃げる最中に襲われ灰へと変じた者たち、彼らを救うことはかなわなかった。

「私がおっと、早くギアを纏っていたら……」

押し寄せてくるのは後悔か、それとも自身の不甲斐なさであろうか。響は今もまだノイズがいるであろう街の方を凝視しながら、その拳を強く握りしめる。

「ん……アレ？」

しばらくすると友奈が目を覚ました。その声を聞いた響はすぐさま表情を和らげ拳をほどき、友奈を静かに起こしてあげた。

「大丈夫？」

「あ、うん……アレ？ 私なんで……はッ！」

目を覚ました友奈は最初、周囲を見渡しなぜ自分がこのようなことになっているのか、どうしてこんな場所にいるのか混乱している様子だった。

だが、その直後に友奈は先程起きた出来事、その全てを思い出したのかその顔は見る見るうちに青ざめていく。

「大丈夫だよ！」

「わっ!? 響ちゃん?」

「大丈夫だから……友奈ちゃんはもう……」

それは友奈を励ますためでもあったが、同時に先程垣間見た友奈という少女の本質へと語りかけるものでもあった。

この日、この少女は多くの人の死を目の当たりにした。そして響は先程の青ざめた友奈の表情から薄っすらとだが感じ取っていたのだ。

この少女の内面に。いくつもの層にて隔たれ、覆い隠された本質を。

(友奈ちゃん……きつと、友奈ちゃんは目の前でノイズに殺された人たち、その人たちの最後の姿を思い出したんだ。そしてそれをまるで……自分の事のように……)

その歪さを……。

(でも友奈ちゃん、友奈ちゃんのせいじゃないんだよ。あれは誰にも、どうすることも出来なかったんだ……。もし誰かのせいだっていうのなら、それは私のせいでもあるんだよ。私だって、あの時ギアを纏えたはずなのに、纏う事が出来なかったんだから、纏わなかったんだから)

何故神樹が、自分をこの少女の傍に置いたのか。その意味が今の響には手に取るように理解ができた。そして、今自分がやらなければいけないことが何であるのかも。

(護ろう……護らなきゃ、この子を絶対に。私みたいに、前向きな自殺衝動なんて言われた、人助けばかりで自分を顧みなかった私みたいに……なつてほしくない、しないために……)

しばらくして友奈も落ち着き、響と友奈はどうか自宅へと2人、自力で帰ることができた。

町での事はすでに立花、結城両家も知っていたので、それはもうすぐごく心配されたが、響も友奈も無事であったため両家の親たちは安堵の表情を浮かべた。

しかし、その一軒でこの世界の人々は知ってしまったのだ。人を襲う災厄、そのことを。

「響ちゃん！」

「あ、何!? 友奈ちゃん」

険しい顔で一人物思いにふけっていた響を友奈が心配そうな顔で声をかけてきた。

どうやら一人で色々と考えすぎ友奈を心配させてしまったようだ。響は友奈に笑顔を見せ安心させるとしばし二手に分かれた後、この日引越してくる2軒の家の人たちに挨拶へと向かうのだった。

「新しいお隣さんだ！」

それはその少女にとってはあまりにも元気で、澆漑としていても明るく暖かな言葉であった。

その少女は他の子どもと大きく違うところがあった。それは車いすであったこと、どこかはかなげで悲しそうにしていたこと。

そんな少女にとって、彼女の元気な言葉、姿は正に太陽のようであった。

「同じ年の女の子が引越してくるって聞いて、楽しみにしてたんだ。年が同じなら、同じ中学になるよね。私、結城友奈。宜しくね」

友奈は引越した手でまだここでの暮らしに不安を覚える少女に手を差し伸べる。

「貴方のお名前は？」

そして、明るく優しい微笑みのまま少女の名を聞いた。

「東郷美森……」

その笑顔に少女も安心したのか、微笑みを浮かべ自らの名を告げた。

「こんにちは、こっちの方の挨拶は済んだんだね」

友奈がこの日引越してきた東郷家の娘、美森に挨拶と自己紹介を終えるのとほぼ同時に、友奈の背後からもう1軒の引越してきた家

へと向かった響が来て声をかけた。

「あ、響ちゃん？ そっちも挨拶が済んだんだね」

友奈がその声を聞き振り向く。するとそこには響と一緒に、自分と今あいさつしたばかりの少女、美森と同一年くらいの少女が立っていた。

「えっと、友奈……ちゃん、そちらの方々は、お知り合い？」

「うん、私の隣に住んでる立花響ちゃんだよ。あれ？ でもお隣の子は……もしかして」

友奈は美森に響の事を紹介するが、隣の少女に関しては面識がなく首を傾げた。するとその少女が友奈と美森の前に出て自己紹介をしてくれるのだった。

「初めまして、今日引っ越してきた小日向未来です」

少女は礼儀正しくそう友奈と美森に告げるのであった。

友奈が自身の家の隣に引っ越してきた東郷家へあいさつに向かうのと同じく、響も自分の家の隣にやってきた家へ挨拶に向かった。

実は友奈は知らないのだが、響は今日引っ越してくるこの家の人たちのことをいち早く知っていた。

そして、会える日をずっと楽しみにしていたのだ。

流行る気持ちを抑えきれずに、響は引っ越しの作業を進めていた業者さんたちの間をすり抜け、一番会たかった少女のもとへと駆け寄る。

「未来〜！」

「ッ!? 響!?!」

そう、引っ越してきたもう1軒の家は響にとって無二の親友である小日向未来の家、小日向家である。

響は溜まらず、元の世界での親友であり、この世界で一番合いたかった少女へと抱き着いた。

そのことで一瞬未来は驚くもののすぐさま彼女も響を抱きしめる。

「会いたかったよ、未来！」

「うん、私もだよ響。やつと、会えたね」

再会を喜ぶ響と未来。しかし少々自分たちの世界に入りすぎていたのか、遅れてあいさつに来た立花家と、小日向家の両親に呆れられてしまった。

「あ、アハハ」

「もう、響の馬鹿……」

そんな恥ずかしい場面を双方の両親に目撃されたことで響は頭を掻きごまかそうとし、未来は顔を赤らめ俯いてしまうのだった。

友奈そして新しいお隣さんの東郷（美森希望で苗字読み）、そして響と同じく響の家の隣に引っ越してきた未来の4人は揃って街の中を歩いていった。

東郷は車いすなので自らの足で歩くことはできず、自力での移動は慣れているとはいえ体力を使う。なので彼女の車いすは友奈が押ししていた。

街を紹介していくうちに響と未来、そして東郷は次第に打ち解けそれぞれのをより多く話すようになっていた。

「じゃあ、元々響ちゃんと未来ちゃんは同じ地域に暮らしてたんだね」

「うん、元々は大橋市に居たんだ」

「ただ、私が神樹館小学校に編入することが決まって、それからはずっと離れ離れだったの」

友奈は引っ越した手だというのに仲がものすごくよかった響と未来に少しだけ疑問を抱きそう問い、響と未来はその問いに答える。

勿論それは転生する前のこの世界での自分たちの経歴なのだが、それでもこの世界で紡いだ自分たちの歴史に変わりはない。

どんな世界でも自分たちは一番の親友同士なのだ。

「良いなあ、私も東郷さんとそんな関係になれたらいいな」

「えっ!？」

「え？ 東郷さんは、嫌だった？」

「いやじゃないけど、その……突然だったから」

友奈のある意味ぶつちやけ発言に驚き東郷は顔を真っ赤に俯いてしまった。

（なんか、友奈ちゃんって元の世界での昔の響みたい）

（東郷さんって、外見だけでなくこういう所も未来に似てるような……）

そんな2人の姿に響と未来は不思議と元の世界での、この頃の自分たちを重ねていたのだった。

そうして世間話をしながら友奈、東郷、響、未来の4人はこの町の都市公園にある桜並木まで来ていた。

「わぁ綺麗」

「本当、とても素晴らしい眺めね」

「引越して来たのががこの時期でよかったね未来」

「東郷さんも」

春真っ盛りとあって、公園の桜並木は満開の花を咲かせていた。その桜並木は2年前に引越してきた響にとっても、そしてそこに小さなころから住む友奈にとっても、一番大好きな場所であった。

その桜を響は未来にも見せてあげたいとずっと思っていたのだ。そして友奈も自分の一番好きな場所を響が引越してきたときは季節もあってその時には教えてあげられなかったことを心残りに感じていた。

しかし、東郷と未来はちょうど桜の花が咲き誇るこの時期の引越しであったので、友奈と響は新しい隣人に一番好きな場所を紹介することが出来たのだ。

「ありがとう結城さん、立花さんに小日向さんも。引越してきたばかりの私に、こんなに優しくしてくれて」

引越してきたばかり、それも車いすの自分にこんなに優しく接してくれたことに東郷がお礼を言う。

「良いよ、気にしないで」

「うん、それに、もう私たち完璧友達じゃん」

「そうだね響、東郷さんも結城さんも」

すると友奈も響も未来はそんな統合にそう言葉を返した。

「友達……でもいいのかしら、私なんか貴方たちの友達で、迷惑じゃないの？」

ふとそんなことを東郷は聞いてしまった。

東郷は正直に言えば不安だったのだ。なぜ友奈と響、そして自分と同じく、この日引っ越してきたばかりの未来まで自分に優しくしてくれたのか。気になって仕方がなかったのである。

というのも東郷にとって友奈、響、未来の3人は事故に遭い車いすとなつて初めて言葉を交わした同年代の子たちなのだ。不安にならない方がおかしい。

「え？　なんで？」

一方で友奈はその質問の意図が分からなかったのか、すつとぼけたような顔で首をかしげる。

「プツ……ハハハ」

そんな友奈に思わず響が笑いだす。

「ひ、響ちゃんなんで笑うの!？」

「友奈ちゃん、ただ東郷さんと仲良くなりたいたってだけだよ。それに、それは私も同じだし」

響は友奈の気持ちを代弁するように東郷にそう告げた。引っ越しして2年しか経っていないとは言っても、既に響と友奈は親友と呼んでいくくらい仲が良くなっている。そんな響だからこそ、友奈がしたいことは手に取るように分かっていたのだ。

「うん、私はまだ結城さんのことは深くは知らないけど、響がそういうのならそうだと思うな」

「それでも不安だっというなら、友奈ちゃんに直接聞いてみたら？」

「う……うん、結城さん本当？」

そう響と未来の2人に言われ東郷は恐る恐る友奈に改めて問いかける。

「うん、私嬉しかったんだ。響ちゃんだけでなく、お隣に同じ年の子が来てくれたってこと」

「結城さん……」

「だから、これからもよろしくね東郷さん」

友奈のその言葉に統合も安心したのか、先ほどまで見せていた以上の笑みを浮かべる。

「私たちも、それと私のことは名前で呼んで。苗字だとなんだかちよつとこそばゆいっていうか……慣れないんだよね」

「あ、なら私も！ 名前で呼んでくれたら嬉しいな」

「もう2人とも。あ、私はどっちでもいいからね。私は東郷さんって呼ぶから」

苗字ではなく名前で呼んでほしい。響と友奈はそう東郷に告げる。

「わかったわ。じゃあ響ちゃん」

「うん！」

「それと……友奈ちゃん」

「うん！ ありがとう東郷さん。これからよろしくね」

「うん、よろしく友奈ちゃん、響ちゃん、小日向さん」

その数日後、友奈、響、東郷、未来の4人は揃って讚州中学に入学する。

そして、彼女たちは否応なしに巻き込まれていう事となるのだ。

この世界の、残酷な現実の只中へと。

「そうか、小日向は無事、◆◆と共に例の少女と立花のもとに付いたのだな」

「ああ、ここまでは全部予定通りだ」

「では、我々も動くのでしょうか。この世界を……そこに暮らす人々を
防人るために」

「ああ……」

少女たちの日常の裏側で、運命の歯車は静かに回り始めていたので
あった。

第1章3話 勇者部の少女

市立讃州中学校。

かつて西暦と呼ばれていた時代は観音寺中学校という名であったこの学校の歴史は長い。また同時代においてはこの中学校の生徒たちがとある老齢の女性の危機を救ったとされ、観音寺市と呼ばれていた当時の自治体から生徒に感謝状が贈られたこともあるという。

この日、この学校は新たに仲間となる生徒たちが、期待と希望を胸に入学式を迎えていたのであった。

そしてその式が終わり各々が自分たちのクラスとなる教室へと向かい終えた時。

「立花さ〜ん!」

そのクラスの担任となった女性教師の怒号が鳴り響くのであった。

「えっと……この子がですね、木から降りられなくなつて……」

「それで〜?」

「きつとお腹を空かせているのかなあ〜つて……ハハハ……」

「立花さん!!」

「うひッ!」

それは彼女、立花響にとっては元の世界の恒例行事であったもの。

それがあろうことかこの世界、この学校でも見事に再現されてしまったのである。

「響ちゃん……またなのね」

「もう、響の馬鹿……」

「アハハハ……」

そしてそれを、既に自分たちの席についていた親友3人は、苦笑いを浮かべながら見守っていたのであった。

初日の授業を終えた響は、今朝の事で担任教師に、それも入学初日に見事な雷を落とされたのが効いたのか、思い切り机の上につき伏していた。

「はあ〜〜〜入学初日にクライマックスが百連発気分だよ〜私呪われてるう〜」

「半分は響のドジだけど、もう半分はいつものお節介でしょ?」

元の世界にて、リディアン音楽院に入学した当時にしたやり取りが、ここでも繰り広げられる。響にとつては災難だが、未来にとつては久方ぶりの響との日常、正直悪い気はしていなかった。

「人助けと言ってよ未来。人助けは私の趣味なんだよ」

「響のは度が過ぎてるの」

「それに、今朝の人は人ではなく、猫助けでしょ?」

そのやり取りに気兼ねなく入ってくる人物が2名ほど。

この世界で知り合った、響と未来の丁度反対となりとその隣に住むクラスメイトにして、この世界においてはもはや無二の親友となった結城友奈と東郷美森である。

「でも、響ちゃん流石だなあって思うよ。困っている人がいたら、どんな時でも勇んで助ける。まるでヒーローみたい」

「えへへ〜友奈ちゃんは分かってくれるんだあ〜」

「こら響、友奈ちゃんを巻き込まないの」

「友奈ちゃんも、そんなことで遅刻なんてしたら、恥ずかしいわよ?」友奈は響のその人助けを勇んでやる姿に羨望の眼差しを向けるが、

一方で未来と東郷の2人からはきつちりお説教が飛んできた。

ここだけの話、実を言うと友奈もかなり頻繁に人助けなどの善行を行っており、未来と東郷が引越してくる前は、響とともに日夜町で困っている人がいたら人助けをすすんでしていたのである。

「友奈ちゃんも響ちゃんも、人助けとなると前後不覚というか」

「後先考えないもんね、見てるこっちは冷や冷やするんだよ」

そんな、渾身猛進な親友達に頭を抱えることもあるが、それでも未来も東郷もそれらが一番彼女たちらしいと、親友たちの度を越した人助けを時には手伝ったりしたりもしている。

それから1週間は何事もなく平和な毎日を響、友奈たちは過ごしていた。

響は相変わらず、本人曰く趣味の人助けを行い始業ギリギリの登校

で雷を落とされることもあったが、元の世界同様の充実した毎日を送っていた。

そんなある日の放課後。

「友奈ちゃん、チアリーディング部から誘われてたんでしょ。入らないの?」

東郷が何気なくそう友奈に尋ねていた。

今日は4人で讃州中学の部活を色々で見学して回っていたのだ。

「うくん、押し花部からの誘いだったら大歓迎なんだけど」

「そんな部活ないでしょ?」

「アハハ、響ちゃんはどうか?」

「うくん、私も正直どこにしようか悩んでるなあ。未来はどうするの? 小学校の時は陸上やってたけど、陸上部に興味とか」

「色々あって流石にブランクがなあ。この辺は結構強いところだし」

とはいっても、4人ともどの部活に入るか決めかねている様子であった。

そうして、あーでもないこーでもないと互いに話しながら構内を徘徊している。

「貴方たちにぴったりの部活があるわ!」

横から突如声をかけられた。

一体何事かと声のした方を向くと、そこにはウエーブのかかった黄色に近い茶髪の長い髪をシュシュで結ってツインテールにしている、響たちよりも一回りほど背丈の高い少女が、何やら片手に多数のチラシを手にし立っていた。

「貴方ちにぴったりの部活があるわ!」

「ふえ!」

「何故2回!?!」

「そりや大事なことだから」

「そんな、お決まりっぽく言われても……」

中々さばけた印象のその少女に響、友奈たちは少々呆気にとられる。

「アタシは、2年の『犬吠埼風』、勇者部の部長よ」

『勇者部?』

その少女が発した聞きなれない単語に、頭の上で『?』マークを浮かべながら首をかしげる響たち。

「とつてもわくわくする響きです!!」

「「え、ッ!?!」」

そんな中唯一人、友奈だけが風のその言葉に目を光らせるのであった。実はこの少女、結城友奈は小さいころからヒーローや勇者という言葉に憧れがあり、それを聞くとある種前後不覚になるという癖があったのだ。

今回のこの犬吠埼風の言った『勇者部』という単語は、友奈にとってはまさしくドストライクなのである。

「おおくフリーリングあうねえ」

友奈のその様子に気分が乗っているのか、目の前の上級生である風はその『勇者部』なる部活の活動内容の描かれたチラシを手渡してきた。

そこに描かれていたのは、非常にわかりやすくまとめられた活動内容の数々。

「勇者部の活動は、世のため人のためになることをやっていくこと」

「要するに、人助けってことですか?」

「そうそう、話が早くて助かるわ」

それはまるで、普段響や友奈が積極的にやっている趣味を部活動としてやる部という事ではないだろうか。

「世のため人のため……なんてすばらしい響き!!」

そして、それに食いついた二匹目の魚がここにいる。それは言うまでもなく、人助けを趣味と語る、立花響である。

「おおくさては君は、日々人助けに興じておる噂の新生くんかあ?」

「はい! 立花響12歳! 誕生日は9月の13日! 血液型はO型

! 趣味は人助けで大好きなものはご飯&——」

「はい響そこまで!」

「ウエ!?! 未来く?」

「ここ廊下のご真ん中だよ、そんな誰が聞いても恥ずかしい自己紹介のオンパレードは人のいないところでやってよね」

響も友奈同様、趣味に走ると前後不覚になるばかりか、響の場合は後先を考えるとということがあまりないので、このような暴走は茶飯事である。もつともそんな親友と長いとこ付き合っている未来にとつてはもはや日常的なことなので、手綱のにぎり方もしつかり心得ており、今回も響の暴走を見事に止めて見せるのであった。

「すみません先輩、私の親友が失礼なことを」

「いやいや良いって、それよりどう？ 興味があるなら一度うちの部活覗いてみなよ。と、言ってもまだ申請すらしてない出来立てほやほやなんだけどね」

『へっ!?!』

突然の風のぶつちやけ発言に今一度響たち一同が固まる。

その後風からしつかり事情を聴いたところ、どうやらまだこの勇者部は部として正式に学校側から認可されていない、つまり風が勝手に始めただけの活動でしかなかったのだ。

そのことに目を光らせていた友奈と響の親友2人は呆れて溜息をつき、風に関しては生真面目なその2人から上級生であるのにきつちりお説教を食らったのである。

「あ……あなたたち2人の親友って……こんな怖いのね……」

「ア……ハハハ……」

「ご愁傷様です……」

とにもかくにも、この風曰く勇者部をキッチリ部として認可してもらうにはまずは部員を集めなければならないのだが、それに関しては心配無用であった。なぜなら人助けが主な活動方針の部活。すでに友奈と響の2人は入部する気満々であり、先ほど説教を食らわせた未来と東郷もそんな親友たちの手助けがしたいと、入部を決めていた。「何はともあれ、これで私たち勇者部の力は5倍になったわ！ それじゃ早速部の申請してくるし、活動に関しては多分早ければ明日からできるから、今日はこれにて解散、以上！」

最後に風はそれだけ言い残すと、瞬く間に部の新星のために職員室

へと駆けていくのであった。

「名前の通りの嵐のような方でしたね」

「私は響が3人に増えたって気分だったよ」

「なんだかすごく楽しい人でしたね」

「うん！ きつとこれからもつと楽しくなるよきつと」

まだ少しだけ不安な感情の残る東郷と未来だが、響と友奈のその言葉には素直に納得できた。

確かに少し、というか結構大雑把な印象が強い犬吠埼風という少女だが、悪い人ではないことは素直に理解できた。何より人助けを活動の方針とするその姿勢からもそれはわかる。

実際、多少の不安はあってもどこかあの人なら大丈夫だと思える何かをあの風という少女は持っているのだと未来も東郷も感じていた。「さて、それじゃあそろそろ帰ろうか。もう日も傾きかけてることだし」

「そうね未来ちゃん、友奈ちゃんと響ちゃんも」

「うん、東郷さん！」

「了解だよ未来！」

4人はそうして、これまでと変わらぬように仲良く、自分たちの家へ帰る場所へと向かうため学校を後にしたのであった。

その日の夜の小日向家。

未来は入浴と夕食を済ませると、いつものように寝るまでの空いた時間を潰す目的で親友とSNSをやろうとスリープモードとなっていたスマホを開く。

だが、そこには彼女にとつて、出来ることなら来てほしくはなかったメールが1通届いていた。

【宛先：小日向未来様

差出人：大赦巫女部・安芸

先日、新たな神託が下りました。小日向様に与えられしお役目は、嘗てと同じお役目に当たる勇者となる少女たちの御付きとなります。

お役目のその日が来るまで、勇者様方と共にお役目に備えるようお願いいたします。

追伸：――】

未来はメールを読み終えると。静かにそのメールの削除ボタンを押し、メールを完全に消し去った。

「わかっています。それが私に与えられた役目だつてことも」

未来はそう一言だけ呟くと、隣にある親友の家の方を見つめる。その瞳は、昼間学校での彼女のモノとは違う。

(あんな悲劇、絶対に繰り返したりなんかしない。響も、友奈ちゃんも……◆◆ちゃんも絶対に守って見せる)

それは決意に満ちた強い眼差しであった。

明るく暖かな日常の中で、少女たちが担う過酷なお役目の時は――

静かに差し迫っているのであった。

第1章4話 BAYONET CHARGE 前編

響たちが犬吠埼風という上級生に誘われ入った勇者部という部活。人助けなどいわゆるボランティア活動を主に行う子の部活動。

設立してから間もないという事で、当初は設立者である風とともに色々と奔走する毎日であった。しかし、パソコン関係に強い東郷美森がホームページを立ち上げ、対応能力や管理能力に長ける小日向未来が積極的に依頼を引き受けたり、交渉したりなど奔走し、響や友奈の持ち前の明るさと一生懸命さを発揮し積極的に依頼をこなしたこともあり、次第に学校内でもこの部活は認知されるようになった。

それどころか、ホームページを見た校外からもその一生懸命さが伝わったのか依頼が徐々にだが来るようになり、勇者部の名は次第に世間に広まりつつある。

そんなある日、風はじめ響、友奈等勇者部の現部員たちは部室の一角に集まり、何やら話し合いを行っていた。

「さて、我等勇者部も今や世間様に広く知れ渡るようになったことだけども、ここでこの際出し、我らが勇者部のルールってか決まり事みたいのを作ろうかなって思ってたね」

風がいつになく部長らしい、そのような発言を行う。

「そういえば、これまで考えたこともありませんでしたね」

「設立して間もなくの頃は、色々忙しかったもんね」

「タイミングとしては、良いのではないのでしょうか」

響、友奈、未来、東郷らは風の意見に賛成の意を示す。そこで早速5人はこの勇者部のルール、というか簡単な決まりごとのようなものを考え始めた。

「よし、それじゃあまずは最初のはどうする?」

「最初ですから、挨拶に関する事などどうでしょうか?」

東郷がまず風にそう提案すると、風は用紙にマジックでこう書いていく。

一、挨拶はきちんと

「早速一つ目ね」

「良いですね」

「人助けの部活ですから、まずはきちんと挨拶ですね」

早速最初の決まりができ皆上機嫌になる。

「それじゃ今度は私から」

次に友奈が風に提案を行う。

「なるべく諦めないっていうのはどうですか？」

「なるほど」

「勇者部は誰かのためになることを、勇んで行う部活なんですから、依頼してくる人たちって本当に困ってるって思うんです。だから、そんな人たちの依頼、出来るだけ頑張りたいんです」

その友奈の提案に風も納得し、2つ目の決まりを用紙に描く。

一、なるべく諦めない

「では、3つ目は私から行きます！」

「おッ！　じゃあ響、言ってみなさい！」

「変なことと言わないでね響」

3つ目は響が提案した。

「私の昔の師匠からの教えです！　『ご飯食べて、アニメ見て寝る！』

女子力の鍛錬はこれで十分!!』——」

「響〜」

「あ、えつと……すみません」

響の提案に未来は先の忠告が全く意味をなさなかったことに頭を抱えつつ、当の親友に凄んで見せた。

だが一方をそれを聞いた風はというと。

「な……女子力……なんと素晴らしい響き!!」

どうやらお気に召したのか、勢いそのままに響のこのおバカ発言を用紙に書き足そうとしていた。

「ちよつと風先輩！　これ響の冗談なんですよ!？」

「そうです風先輩！　決まりなんですからちゃんと考えた方が良いのでは!？」

それを慌てて止める未来と東郷の2人。

「でも、響ちゃんの師匠さんの言うことも一理あると思うな私」

「まあ、確かに間違ってるとは言いきれないわね」

「なら、表現をもう少し砕いて……これでどうですか?」

すると友奈がある種の妥協案のようなものを出し、未来がそれを
紙に書いていった。

一、よく寝て、よく食べる

それでついに決まりが3つになった。

「よし、他に何かある人は挙手!」

「なら、今度は私が良いですか?」

4つ目の決まりの提案を行ったのは未来。

「勇者部が、世のため人のためになることを行う部活だってことは、
ちゃんと分ります。でも、だからこそなんですけど、みんな自分たち
だけで抱え込んだりせず悩みがあったら相談してほしいんです」

「なるほど、流石未来」

「未来ちゃんの言うとおりね」

「それじゃ4つ目はこれですね!」

「よし! じゃあ書くわね」

風は未来の提案を受け早速4つ目の決まり事を用紙に書いていっ
た。

一、悩んだら相談

「これで計4つね、あと一つあれば勇者部5カ条って感じでカッコい
いんだけどなあ」

これで一応の決まりはできたが、風はまだ満足してはいない様子。

そこで風、友奈、東郷、響、未来の5人はみんなで残り一つの決ま
り事を考え始めた。そしてしばらくしてから東郷がこのような提案
を口にした。

「なせば大抵、何とかなるというのは?」

「おおう!」

「なんだかいいですねそれ」

「うん、流石東郷さんだよ!」

「うんうん、私たち勇者部にぴったりの決まりじゃない。これで完
成っ!」

そしてついに、勇者部の決まり事——
名付けて『勇者部5カ条』が完成した。

- 一、挨拶はきちんと
- 一、なるべく諦めない
- 一、よく寝て、よく食べる
- 一、悩んだら相談！
- 一、なせば大抵なんとかなる

それは正しく、この勇者部を象徴する決まりへと、その後変わっていくことになる。

勇者部の活動も軌道に乗り始め、最近では校内以上に校外の活動も多く依頼が入るようになってきた。特に多いのが幼稚園などでの子供会の手伝いや、老人会の方々へのオリエンテーション、河原や公園の掃除など、まさに世のため人のためになる活動である。

普通であれば学業を優先する中学生、トラブルなどを避けたがる学校という組織の在り方故校外での活動などは学校側もこの神世紀の世と言えどあまりいい顔をしてはくれないことが多いのだが、彼女たちの直向きな姿勢に加え、部員である少女たち5人の熱意もあって比較的好意的に捉えられている。

「このくらいで良いですかね？」

「ああ、助かったよ、人手が欲しいと思っていたところだったんでねありがとうとお嬢ちゃんたち。お疲れさん」

『お疲れ様ですー！』

今日も勇者部の5人の少女は街のとある公園の清掃活動を手伝っていた。単純に公園を綺麗にするだけなら、専門の業者を雇うのが費用対効果など効率面を考えればそちらの方がはるかに早くて良いのだが、こういったボランティアなどによる清掃活動をあえて行うのは、人々の繋がりを何よりも強く尊重すること、それこそが神樹様により護られる人々のより良い在り方であるという、神樹信仰と道徳教育をより深く重視するこの世界ならではのともいえる。

何よりもみんなを使う公園だから、街のみんなで綺麗にしようというごくごく当たり前の人々の思いからの物も強い。

「しっかし、こう頑張ってくれたからなあ、おじさんたちで何かお礼がしたいんだが」

「いえ、気にしないでください。私たちも部活動でやってることなんで」

「そうかい？ でも若いのに君らはよくやってくれたよ。今どきはこういう活動もあまりやらないからなあ、ましてや若者なんて中々参加してくれねえもんだし」

それに直向きに汗をかきながら公園を綺麗に清掃する勇者部の少女たちの姿は、同じくこのボランティアに参加する大人たちにとって励みとなっていた。

学校に勇者部の活動にと、響と友奈たちは慌ただしくも楽しい日常を満喫していたそんなある日、既に年も明けお正月を家族と共に過ごした生徒たちも再びの学校生活に戻っていたそんなとき、響と友奈、未来、東郷の通うクラスでとある事件が起きた。

「転校生？」

響がそう首をかしげながら未来に話しかけていた。

「うん、実は年明けの前ですでに決まっていたんだって。でも諸々の手続きとかで今日まで引き延ばしになってたって先生の話を聞いたんだ」

「こんな時期に転校生ですか」

「いったい誰なんだろうね」

そういつもの4人で話していると、丁度担任の先生が入ってきたのが見え、響たちは慌てて自分たちの席へと戻っていった。

「おはようございます。皆さん」

教壇に付くと担任教師は軽く挨拶を行う。

「突然ですが、このクラスに新しい仲間がやってきました。どうぞ、入ってきなさい」

響と友奈たち4人はあらかじめ知っていたが、他の生徒たちは今日

までそのことを知らなかったため、にわかには教室内はざわめいている。しばらくすると担任教師の言葉に応じ一人の女子生徒が教室内に入ってきた。

(ええっ!?)

その女子生徒を見た響は心の中で驚きの声をあげていた。

その女子生徒は銀髪の髪を赤いリボンで細くツイントールにした、端正な顔立ちの誰もが美少女と形容してもおかしくない容姿を持つ少女であった。

響はその少女に見覚えがあった。

忘れるはずもない。何せその少女は――。

「雪音クリスさん。今日から皆さんと同じクラスになります。雪音さん、みんなに自己紹介を」

「雪音クリスです。よろしくお願ひします」

立花響にとって大切な戦友の一人なのだから。

突然の転校生に響たちのクラスはあつという間に騒がしくなる。休み時間ともなればどの世界でも共通しての事なのか、転入生にとってお決まりと言える洗礼を当のクリスも盛大に浴びせられていた。

「ねえ、雪音さんって前はどこで暮らしてたの!？」

「綺麗な髪だよね」

「お父さんとお母さんって、有名な音楽家なんだってね!？」

それを少し離れた位置から響、友奈たち4人は眺めている。

「ねえ、止めなくていいの?」

「それは……山々なんだけど……」

友奈と東郷はクリスの紹介の後、1限目の授業が終わった休み時間の時に響と未来から転入生であるクリスに関して少しばかり聞いていた。

もつとも、響と未来にとってはこの世界でのクリスの人となりに関する事しか話さなかったのだが。

この世界のクリスは両親が健在であり、またその両親は元の世界で

のクリスマスの両親同様、父がバイオリニスト、母が声楽家であり、四国ではかなり有名な音楽家と名が知られている。

また雪音家はこの世界において神樹を祀る組織、大赦とも深いかわりのある名家の1つだという。その為か普通の転入生以上にクリスは多くのクラスメイトから質問攻めにあっていた。

「悪い、少し外してもらえないか？　ちよつと話したい奴らがいるんだ」

「え？　ええ、分かったわ雪音さん」

「後で色々聞かせてね」

「ああ、いいぞ」

すると何やらクリスマスが周りの生徒たちを下がらせ響たちのいる方へやってきた。

「あ、クリスマスちゃん」

「立花響と小日向未来、ちよつと一緒に来てくれるか？」

「あ、うん……」

「良いよクリスマス。ごめんね友奈ちゃん、東郷さんも……少し外すね」

響と未来は友奈、東郷の二人にそう理を入れると、クリスマスと共に教室から出ていく。

「いったい何のお話なんでしょうか雪音さん」

「ちよつと気になるよね」

友奈と東郷の2人は響たち3人の事を気に掛けるも、何か大切な話でもあるのだらうと、彼女たちの帰りを待つことにした。

教室から出た3人がいたのは、丁度階段脇にある人目の付きにくい一角。そこでクリスマスと響、未来の3人はいかなればこの世界に転生してから起きたことを簡潔に話し合っていた。

「驚いたよクリスマスちゃん、まさか私たちと同じクラスになるなんて……もしかして留年した？」

一言二言多いのが響の悪い癖。当然それはクリスマスを思い切り怒らせることになる。

「ふざけんな！ この世界じゃ何でか知らないけど、アタシの年齢がお前らと一緒になんだよ！」

「ふえ!? そうなの?」

「うん、私も最初驚いたよ。前に通っていた小学校でも同じクラスだったし」

なんと、この世界ではクリスと響、未来が同じ年なのだという。

元の世界でのクリスは響、未来よりも1歳年上であったので最初転生したての頃、未来はそのことに驚いたと語る。

「でも、そのおかげで情報のやり取りとかにはあまり困らないね、3人一緒にクラスだから」

「まあ、神樹様もその辺を配慮でもしたんだろうな。余計なことをと
思うが。それに……」

「クリスちゃん?」

「何でもねえよ。それより、そっちはどうだよ?」

クリスは現在までの響たちの近況を聞く。

「今は普通に過ごしてるよ」

「そうだ、こつちで仲良くなつた友達と一緒に部活やってるんだ。よ
かったらクリスちゃんもどうかかな?」

「なんだよ部活って」

「フッフ、その名も勇者部っていうんだ!!」

「勇者部?」

クリスは響の口から出た言葉に若干呆れ顔になる。

「そ、世のため人のためになることを勇んで行うっていう、もう、この
世でこれ以上ないって楽しい部活なんだよ!!」

響は今現在自分が入っている部活に関して、拳を握り締め正に熱く
語る。だが一方その話を聞いていたクリスはどういうと。

「なんだそりゃ、まるでお前が毎回やってるスクリーンボールなこと
をそのまんま部活にしましたみたいなき感じじゃねえか」

「流石クリスちゃん! 分かってるうー!」

「分かりたくねえよ……」

「アハハ……」

響とは真逆に盛大に呆れていた。それもそのはず、響の美德は言うまでもなくどのような苦難も何のそのといった感じでまっすぐなまま解決しようとすることや、彼女自身趣味と語る人助けなのだが。クリスはその響きの度を超す人助けに心底げんなりすることが多かった。

まさかこの世界で迄そのいわゆる『悪い癖』を發揮してるばかりでなく、まさかそれを部活動でやっているとは、しかもそんな部活を作る輩がこの世界にいるなど。クリスは正直頭が痛くなった。

「でも、響の言うことも一理ありかな。実際に楽しい部活だよ。みんないい人たちだし」
「うんうん、だからクリスちゃんも、見学だけでもいいから来て見なつて」

しかし、未来からも進められクリスも正直理辛くなり、まあ見るだけなら減るものでもないといった気持となった。

そして時間はあつという間に過ぎ放課後となる。響と友奈、東郷、未来に新たに加わったクリスの5人は揃って勇者部の部室へと向かうのであつた。

第1章5話 BAYONET CHARGE 後編

時は響たちのクラスにクリスが転校してきた時まで遡る。

ここは響、友奈たちを勇者部に誘った2年生、犬吠埼風のクラス。もとより人当たりの良い性格である風は、いつものように仲の良い友人たち数人と楽しく世間話をしていた。楽しい時間というのはあつという間に過ぎてくもので朝礼の時間となり、担任の教師が教室に入ってきた。

「ええ、突然ですが、今日は転入生を紹介します」

(転入生?)

突然の担任教師の言葉に風を含む教室内の生徒たちは騒めく。こんな時期に転入生とは珍しい。一体誰なのかと多くの生徒が期待に胸を膨らませる。

「では入ってきなさい」

担任教師がそう転入生を呼ぶと1人の女子生徒が教室に入ってきた。

「今日からこのクラスの新たな仲間となる、風鳴翼さんだ」

「風鳴翼です。よろしくお願ひします」

転入してきた女性生徒は整った端正な容姿にスラっとした青色の長髪の少女であった。

「風鳴翼……」

風は何故か知らないがその少女を見た時奇妙な感覚に襲われたのだった。

そして再び放課後まで時間は戻る。

今日1日、響たちのクラスは転入してきたクリスの事で騒がしいものとなった。クリスはある後再び多くのクラスメイトから質問攻め

にあつたが、幸い響きや未来たちがフォローを入れたことでどうにかこなすことができ、今は響たちの勧めで響と未来が所属する勇者部なる部活に見学へと向かう途中であつた。

響、未来からは今の2人の友人たちである友奈と東郷も紹介してもらい、最初はぎこちなかつたものの1日でそれなりには打ち解けていた。

もとよりお人よしが過ぎると内心思つてしまふくらいの響と未来。その友人とあつて性格や思考パターンが似通つており、クリスが打ち解けるのに時間はそれほど必要ではなかつたようである。

響と未来、友奈と東郷にクリスを加えた5人は勇者部の部室までの道を楽しく世間話をしながら歩いていき、気付けばあつという間に部室の前までやつてきた。

「じゃくん！　ここが私たち勇者部の部室だよ！」

「ふうくん、何だ、意外と普通な感じなんだな」

響と未来、友奈と東郷の4人がまずは戦闘に部室に入り挨拶を行う。

「失礼します！　響並びに未来——」

「友奈及び東郷入りまーす！」

「それと、今回はお客様もお連れしました！」

「来たわね。て、お客様？」

響と未来、友奈と東郷の4人は部室に入るとすでに部室に来ていた風にクリスの事を話す。

「へえ〜アンタたちのクラスも転入生が来てたのね」

「はい！　て、貴方たちもつてどういうことですか？」

ふと風が言ったことに首をかしげる響たち。

「実を言うとな、アタシのクラスも今日転入生が来たのよ。それだけじゃなくね——」

「犬吠埼、ここで良いのか？」

「ツ!？」

「風先輩、そちらの方は」

最初入つてきたときは気づかなかつたが、部室には風の他にも見慣

れない上級生の姿があった。友奈と東郷はその上級生の姿に驚き風にわけを聞く。

だがそれ以上に驚いていた人物が3名ほどいた。

「えっ!？」

「うっそおおおお!？」

「どういうことだよ先輩!？」

それは言うまでもなくだが響と未来、クリスの3人。

「誰かと思えば立花に雪音、小日向じゃないか。久しぶりだな」

一方、当の本人は何気ない感じに響たち3人にそう声をかけていた。

部室にいた上級生。その上級生は響たちがよく知る人物だったのだ。

「えッ!? これはいったい、どういう事なの?」

「や……や……あ?」

「どういうことなのでしょうか……?」

尚、風と友奈、東郷の3人は自体が読み込めず3人揃って首を傾げるだけであった。

しばらく時間を置き、ようやく響たちも落ち着いて話ができるようになった。

部室に入ってきた当初はもう、気が動転したというか、もうまともに話などできるような状況ではなかった。

響は大慌てになり、未来は何やら頭を抱え、クリスに至ってはその元凶である上級生に、もう食って掛かっていた。

「それで、何で先輩はここにいるんだよ?」

「なぜも何も、この学校に転入してきたからだか?」

「そうじゃねえ! あたしが言いたいのはな——」

「まあまあ落ち着いてクリスちゃん。これじゃあこの方もお話しできないでしよ?」

再びクリスがその上級生に食って掛かろうとしていたので東郷がそれを止め風に何故ここに彼女、風鳴翼がいるのかその理由を聞いた。

「いやあ、部活動するのか聞いたらさあ、咲良の奴アタシの作った勇者部の事をポロつと喋っちゃってね。そしたら妙に興味を持たれたっていうか、えらく気に入られちゃって。まあ部員が多いに越したことはないから、そのまま勢いで部員登録……しちゃって……」
「ハアツ!？」

風の返事に二重の意味で素つ頓狂な声をクリスが挙げた。

1つ目は部長である風のお気楽ぶりに、そしてもう1つは――。

「うむ、勇者という響きに引かれてな、面白そうな部活と思いきつそく入部を決意した次第だ」

この目の前でたった今ぶつちやけ発言を全開にしている剣先輩に
関してだ。

「わけがわからねえよ……」

どこぞの魔法少女ものアニメに出てくる白饅頭なマスコット宜し
くなセリフを吐くクリス。

「それはそうと、転入生含め翼と響、未来も知り合いなのよね？」

「ア……アハハ……はい」

「前いたところで先輩後輩だったんです。響が引つ越した後、私も別の学校へ転入することになって、それ以来ずっと疎遠だったんですけど」

未来と響は翼とクリスと自分たちとの関係に関し風たちに説明する。

もちろん、それはこの世界における自分たちに関するものである。

「ということは、響ちゃんにとっては2年ぶりの先輩、旧友との再会だったという事ですね」

「そっか、よかったね響ちゃん、未来ちゃんも」

「えへへ、ありがとう友奈ちゃん」

確かにこの世界に来てから、こうして互いにたちときちんと話すのは久々な響たち。正直なところ嬉しいなんてものではない。

体感にして2年、それは決して響たちにとって短いものではないのだ。

「それじゃ翼さん、クリスちゃんも——」

『ようこそ、勇者部へ!』

何はともあれで新たな仲間を歓迎する友奈たち。

「はあ!」

「うむ、歓迎ありがとう皆」

だが、帰ってきた返事は2人それぞれ異なるものであった。

「先輩は兎も角、アタシは入るとは言ってないぞ?」

「え? その為に来たんじゃないの?」

「違う!! というか、なんでいつの間にもアタシも入る流れになってるんだよ!」

クリスはそう友奈たちに反論するが、そのとおりである。

今日クリスは響と未来の2人に、端に誘われたからついてきただけでそもそも勇者部に入ろうなどという気はなかった。

どういう部活か確かめ、そのうえで判断するつもりであり、もし自分に愛想に無いのなら入部することは2人には悪いが断ろうとも考えていたのだ。

「でも、私も未来も、翼さんも入ってるし、ならクリスちゃんも一緒の方がいいでしょ?」

「お前なあ……て、おい小日向!」

響からも入部を推す声上がるが、それでもクリスはかたくなに首を縦に振ろうとはしていなかった。だが、その時未来がふとクリスの手を引き部室の角の方へと移動する。

「クリス……クリスはここに来るとき、何かメールとか来ていない?」

「なんだよ突然……メールって……そういう事が……」

「うん……たぶん……だから……ね?」

「………わかったよ」

そこで何やら2人で内緒話のようなことを始めた2人。

「ちよつと? あんたたちそこで何ひそひそ話してるのよ!」

流星に気になるので風が2人を呼ぶ。すると未来は笑顔で、一方の

クリスは少し納得いかないといった感じの顔で。

「すみません、ちよつとクリスとお話を」

「しようがねえから、アタシもこの部活に入つてやる。そんな変わり、活動の時はビシバシ行くから覚悟しとけよな！」

そう風に告げた。

「フッフ、鍛えがいあるのが来てくれたわね」

「風先輩！ 勇者部、結成してまだそんなに立ってないのに、もうこんなに大きくなりましたね！」

「うん！ これですら勇者部の力は、さらに倍増つてことね」

結果としてはあるが、本日晴れて雪音クリス、風鳴翼の2人も勇者部へと入部した。人数も増え、正しく風の言うとおり勇者部の力は倍増したと言える。

その直後だが、未来は風にある事を頼む。

「すみません風先輩、実は折り返して相談が」

「ん？ どつたの未来？」

「せっかくですから、つば……風鳴先輩とクリスにこの街を案内してあげたいと思つていて、今日はお休みをいただきたくなんです」

未来の頼みとは今日自分たち、正確には響と自分、翼、クリスの4人は部活を休ませてほしいというモノであった。勿論、それには彼女たちなりの深い事情がある。

「ふくん、なるほどね。分かったわ、どっちみち今日は依頼もないし、部活も休みにしようかなんて考えていたところなのよ。いいわ、行つてきなさいな」

「ありがとうございます」

風は未来からのお願いを快く受け入れてくれた。

風の言うとおり、今日は依頼もなかったので勇者部は事実上のお休みとなる。響と未来はクリス、翼を引き連れ今自分たちの住んでいる街を案内してあげていた。

しかし、話す内容は決して明るい世間話などではない。事実、今こうして街を歩く4人の表情は険しいものである。

「こんなに早くお二人がこちらに来るなんて……」

「事情が変わったのだ……」

「ああ……そっちも、もう報せは受け取ったんだろ？」

「はい……」

響も未来の隣で未来たち3人の話に耳を傾けていた。

響は詳しい事情を知ることはないが、それでも一切無関係ではなく、出来る限り3人からこの世界で何をしていたのかなど、情報を得ておきたかったのだ。

しかし、響自身が聞いてもまだ話せる内容ではないと未来たちから返されるばかりであり、今の会話に関しても当たり前障りがない範囲でのみのものとなっている。

「立花にはすまないことをしていると我々も感じている。だが、こればかりはな……」

「そうそう話せる内容じゃないんだ」

「大丈夫ですよ翼さん、クリスちゃんも。分かってますから」

正直疎外感を感じてはいるが、響自身元の世界で親友である未来や級友たちに同じように話せない事を幾つも抱えていたこともあって、3人がなぜそうしているかは理解しており不満を感じることはない。

「だが、段階を踏み話していくつもりだ」

「というより……お前にはいろいろと協力してもらわないといけなくなるからね、これから先は……」

もともと、3人とも何れは響にも自分たちのやろうとしていることに協力させるつもりであり、時が来れば今は話せない内容に関しても話すつもりでいた。

「それはそうと、今日は一体どちらに？ 話したいことがあるって聞きましたけど」

そんな中ふと、響は今自分たちが向かう場所がどこなのか疑問に思いそう翼たちに問うた。これに関しては実は未来も聞かされておらず未来も同じようにクリスに聞いていたところである。

「ああ、それに関しては……どうやらついたようだな」

「え？ へんって……」

どうやら話し込んでいる間に目的地に着いたようである。

そしてそこは響にとってなじみ深い場所である。何せつい1年ほど前までそこに通っていたのだから。

「讃州小学校……ですよね？」

「ああ……もうすぐ時間なのだが……」

「どうやら来たみたいだな」

「えっ!？」

すると正門の向こう側から2人、少女らしき人物がこちらへとかけてくるのが見えた。翼とクリスの様子からどうやらその少女たちが2人が今日響と未来を連れ出した理由のようであった。

「嘘……」

「まさか……」

正門からかけてくる2人の少女の姿を目にしたとき、響と未来に正に電流のごとき衝撃が走る。なぜならばその2人の少女。その容姿は響、未来の2人にとって決して忘れてはならない者たちと、ある少女たちと瓜二つであったのだ。

「お久しぶりです。響さん未来さん」

「本当、お久しぶりなのデス!」

その2人の少女とは月読調と暁切歌。

元の世界において、響たちと共にシンフォギア装者として戦った。かけがえのない仲間たちである。

第1章6話 FLOWER

時間は少しばかり遡る。

ここは勇者部の部室。そこには現在3人の少女たち、結城友奈、東郷美森、犬吠埼風がいた。

今日は予定もなく、また響たちの頼みで部活は休みとなった。しかし普段は部活動で遅めに帰っていることもあり、正直な話3人は暇を持って余している。

このまま学校内にいたところでやることもないのだからすぐさま帰宅するのが普通なのだが、家に帰ったところでやはり暇なのは変わらない。

こういう時はやはり、何かしら暇をつぶせるものが必要だと、彼女たちが思い至るのは当然であって。

「フフフ……気になるわねあの4人……」

「なんですか風先輩……その悪巧みをしてるかのような顔は」

風たち3人はつい先ほど部室を去った響たちの様子を伺おうと後をつけるために響たちが続いて帰り支度を済ませ部室を後にするのであった。

時間は再び戻り風たちは今響たちと同じく讃州小学校にいる。

流石に距離を取っていたこともあって響たちの会話は風たちの耳には入っていない。仮にもし入っていたのなら今頃は大騒ぎであったはずだ。

しばらくすると響たちの方へ2人の小柄な少女たちが駆け寄っていくのが確認できた。

「誰かしらあの子たち……」

「雰囲気から察するに、響ちゃんたちとも御知り合いのようですね」

「うん、もしかして響ちゃんたちの後輩なのかな？」

だが同じ学校であったにもかかわらず友奈には響たちが会っている少女たちの顔は覚えがない。

しばらくそのまま響たちの様子を見ることにした風たち。しかしそれに気を取られすぎてしまい、自分たちに近づいてくる人物に気が付かなかった。

そしてそのことが今の風たちに致命的な結果を招き寄せてしまう。

「お姉ちゃん!？」

「えっ!？」

突然、そう呼ばれ風は慌ててその声のしたほうへと顔を向ける。

「お姉ちゃん」そう自分の事を呼ぶ人物は1人しかいない。その人物は風にとっては大切な人、そして友奈と東郷の2人もその人物とは面識がある。

「樹!？」

その人物とは犬吠埼樹。風の妹だ。樹は友達と一緒に正門まで来た後、正門の付近でまるで隠れてるかのような雰囲気で電柱付近にいた風たちに気がつき声をかけたのだ。

「一体何やってるのお姉ちゃん!? 東郷さんと友奈さんまで」

「えつとね樹……これは……」

突然の事であたふたしながら事情を説明しようとする風だが、流石に妹の手前、まさか今日転校してきた新入部員と響、未来の2人を尾行してきたなど言えるわけもなく、しかも樹に気を取られていたせいで別の方角から来る者たちに気づくことが出来なかった。

「一体何やってるんですか? 風先輩」

「いっ!？」

ものすごく冷え切った、それこそ背筋が凍るとはこのことかと思えるほどの声が風たちの背後から聞こえ、恐る恐るその声の聞こえた方向へと振り返る。

「エツト……コヒナタサン、コレハグウゼンデスネ……ハハハ」

そこに立っていたのは、ものすごく笑顔で、しかしその額には間違いなく青筋が浮かんでいる小日向未来と困ったといった感じに額に手を置きうなだれている立花響、そして明らかに不機嫌そうな顔の雪音クリスと風鳴翼。その背後には何が起きたのかといった感じに驚

きの表情を浮かべる月読調と暁切歌が立っていた。

「全く……何をやってるんだ君たちは……？」

「尾行とは、ずいぶんなことをしてくるじゃねえか……」

「さすがにどうかって思いますよ？ 風先輩、友奈ちゃんと東郷さんも……」

響たちは実をいうと最初の方から風たちには気づいており、ここまでの会話も風たちに聞こえてもいいよう注意を払いつつ行っていた。しかし正直言つて勝手に人のプライベートをのぞき見されるのは気分がいいものではない。

この後言い出しっぺである風に未来がキツチリお灸をすえ響たちは仕方がないという事で友奈たちも交え、新たにメンバーに加わった調と切歌、そして風の妹の樹とともに街を案内することにした。

「それじゃ、私とは同い年なんですわね」

「そうデスね」

「クラスは違うけど」

そんな中同い年ということもあり、樹と調、切歌の3人は意気投合しガールズトークに花を咲かせている。

「全く、尾行なんざしなくても一緒に来たいってんならそういやいいだろお前ら！」

「ですから、これは風先輩が勝手に言い出したことですよ。私は正直気が進まなかったんです」

一方でクリスはまだ風たちが勝手に尾行してきたことにお冠の様子であった。最もクリス、更には響たちにとってはこの機会に色々と話し合いを行うつもりだったので、正直このような形でそれが頓挫してしまったのは気分がいいものではないのは確かだ。

とはいえもう過ぎたことでもあり、これ以上はさすがにかわいそうだと響、未来の2人に窘められクリスも怒りを収めた。

「でも、なんやかんやでみんな揃っちゃいましたね」

「フッフ、勇者というモノはいつでもどこでも一緒にモノよ！」

「端についてきただけだろうが、勝手に……」

何はともあれ、結局は勇者部の皆も勢揃いのこの状況、ただ街をこ

の大所帯で歩くだけというのは味気ないモノ。そこで勇者部の部長、犬吠埼風は先の汚名返上とばかりにある提案を投げかけた。

「折角なんでこの不肖、勇者部部長犬吠埼風！ 新入部員の為一肌脱ぎまじょうかしら！ みんなを絶品のうどんの名店かめやで奢ってあげるわ！」

かめやとはこの世界に来た響たち含む勇者部部員たちが部活帰りによく利用する。今では老舗中の老舗のうどんの名店である。

当然味は絶品、元の世界においてもうどん県ともいわれるくらい四国の香川。その名に恥じない見事な出来のうどんに響と未来の2人もすっかり虜となっていた。

「お姉ちゃん……言い辛いんだけど、今日のかめや定休日だよ？」

「なぬっ!? ガ————ン……………」

しかし残念ながら今日のかめやは定休日であった。折角の汚名返上のチャンスが脆くも崩れ去りドンと落ち込む風である。

「たく、何がしたいんだよこの部長様はよ……」

「クリスちゃん、いつもの事よ風先輩のコレは」

「お前ら……慣れたもんだな……」

東郷の言うとおり、この行き当たりばったりの大雑把さ派風的美徳であると同時に欠点である。それに色々と助けられることもあれば、苦勞させられることもあるのがこの勇者部という部活の特徴でもあった。

クリスに言われるまでもなく、それは部員である響や未来も最早である。

「はあ……仕方がないですから、私と未来の行きつけのお店に行きま
す?。」

「あ！ あのお店だね響」

「ああ！ あそこかあ!!」

「そうね、久しぶりにみんなで行きまじょうか」

するとそこに響と未来が風が助け船を出す。

「うん? 何4人とも……」

「行きつけの店なんてあるのかよ?。」

「うん、たぶんクリスマスちゃんと翼さん辺りは驚くんじやないかな？」

響と未来、友奈、東郷の案内の下一回は響たちが行きつけというお店へと向かう。

そして着いた先にあつたお店の外観に、主に翼とクリスマス、更には調や切歌も驚くのであつた。

「なッ!？」

「なんデスとッ!」

響たちの案内したお店にはでかでかと看板に『フラワー』という文字が書かれ、店内からはとても美味しそうな好み焼きの香りが漂ってきていた。

「ここ久しぶりだなあ〜」

ここは未来の家族が引越してきたとき、立花家のみんなと共にお祝いにと行って知つたお店だつた。

何より響と未来、元の世界でリディアンに通っていた生徒にとつては馴染みのお店。好み焼き屋さんフラワーと全く一緒の外観と味に響と未来は驚いた。

それを知つてその後は何度か友奈、東郷も誘つて来たこともあり、響と未来のみならず東郷と友奈も知つていたという事だ。

「立花、小日向。なぜこの店がここにある!？」

当然だが翼とクリスマスたちは元居た世界と寸分違わぬこのお店に驚愕している。

「実をいうと……」

「私たちの周り、結構知ってる顔の人たちがいっぱいいるんです。讃州中の同じクラスにも板場さんや安藤さんたちにそっくりな友達がいまから」

「ああ〜そっぴやいたな……」

未来と響が言うとおりに、響たちの周りには元の世界で知り合つた人たちにそっくりな人たちがかなりの数いた。元の世界で並行世界を行き来できる聖遺物、ギャラルホルンで様々な世界に赴いた経験があつたが、それと同じことなのだろうと翼とクリスマスも感じている。

しかしまさか転生した先でこうまで似たような場所、人物が揃うと

いうのは、やはり神樹が何かしらの事をしたのではと邪推までしてしまふほどだ。

「それよりみんな、入って入って」

「おばちゃんお邪魔しまーす！」

何はともあれ店内へと入っていく響たち。

「やけに混んでますね」

「うん、本当」

今は夕方、学校帰りの生徒や仕事帰りのサラリーマンなどで込み合う時間帯なのは事実だが、今日はいつも以上におばちゃんも忙しく動いていた。

「あら、いらっしやい。悪いねこんな中で」

「いえ、それはいいんですけど……どうしたんですか、今日はやけに」
いつも以上に忙しく客への対応が追いついていない様子が気になり未来がおばちゃんに事情を聴くと。

なんでも本来今日、バイトで来るはずだった大学生が急な講義で遅れているとのことだった。しかもシフトの代わり際であったことも災いし、このような大混雑となってしまったのだという。

「悪いねこんなことになって。でも大丈夫だよ、おばちゃんこのくらいの事には慣れてるからね」

「でも、ものすごく忙しそう」

「何なら手伝いましょうか？」

今日のフラワールの状況は響たちの目で見ても明らかに忙しく、正直大学生のバイトが来るまで持たないだろう感じであった。そのため響がそうおばちゃんに言うが、おばちゃんは平気だからと断りを入れる。

「でも、お客さんの対応、うまくいってないですよね」

「うん、そうだよ。おばちゃんのお好み焼きおいしいのに、これじゃお客さんかわいそう」

友奈、東郷もそうおばちゃんに良い手伝おうと口をそろえる。

すると――。

「なら、この窮地我ら勇者部が引き受けました！」

景気のいい声がフラワー内に響き渡った。

「世のため人のためになることを勇んで行うのが、我ら勇者部！

困っているのなら遠慮なくいつてくください」

「へえ、あんたら今巷で話題の勇者部なのかい？ それなら……折角だし手伝ってもらおうかね。本音を言うとか猫の手も借りたいところだったんだよ。でも気が引けてね」

風の提案に最終的にはフラワーのおばちゃんも折れ、風はじめ勇者部のみんなでフラワーを手伝うことに決まった。

「雪音、私たちも手伝うぞ」

「まあ、あのおばちゃんには、元の世界でも世話になってるからな。手伝うのはやぶさかじゃない」

「切ちゃん、私たちも」

「もちろんデース!!」

「えっと、お姉ちゃん私も手伝うよ」

「ありがとう。それでは3人を臨時の勇者部員に命ずる!!」

「はい（デース）！」

さらには翼、クリスに加え小学生組の調、キリか、樹も一緒になってフラワーを手伝うことになる。

手伝いの内容は料理が得意な東郷、風がフラワーのおばちゃんと共に厨房に立ち、響、未来、友奈が手分けしてお客さんの対応を行い、樹、調、切歌の3人が裏でお皿洗い。翼とクリスの2人はお客さんがいなくなった席の片づけ（なお翼は早々にクリスの進言で離脱してしまっている）である。

途中からは大学生のアルバイトも合流しどうにか夕方の込み合う時間帯を乗り切ることが出来た。おばちゃんの長年の経験やアルバイトの手際の良い対応もそうだが、何より響たちが手伝ってくれたことの功績が大きい。

「ありがとうねみんな。おかげで助かったよ。さて、それじゃ今度はアンタたちの番だね」

そういうとフラワーのおばちゃんと大学生のアルバイトは手伝ってくれたお礼にと勇者部と調、キリか、樹の分の特性のお好み焼きを

振舞ってくれた。

「ありがとうございます。それじゃいただきますー！」

『いただきます（デース）』

出来立てほかほか、熱々のお好み焼きを皆一斉にほうばる。

「お……おいしい!!」

「うん、何枚もいけちゃうよ」

「ああこの味だあく久しぶりだよ」

「本当、いつ食べてもおいしいです」

皆フラワー特性のお好み焼きご満悦の様子。それは勿論。

「うん！ 流石おぼちゃんのお好み焼き！ 頬つぺた落ちそう」

「本当、うめえな！」

「ああ、この味……懐かしいというか……」

「おいしいデスよ!!」

「うん、切ちゃん」

響たちも同じである。

あつという間にお好み焼きを平らげる響たちと勇者部の面々。風と響があまりのおいしさに計3枚も平らげた。

『ごちそうさまでした』

「お粗末様」

とてもおいしいお好み焼きを振舞ってもらいすつかりご機嫌となった勇者部の面々、するとそこへ突如誰かのスマホが鳴る音が店内に響き渡った。

「あ、ごめん少し外すね！」

そのスマホは風のモノであったようで風は急ぎ店の外へと向かっていく。

「どうしたんだろう風先輩」

「難しい顔してたわね、友奈ちゃん」

その時の風の顔が何やら影が差したかのような、東郷が言う通り難しい顔をしていたことが気になりそう言葉を漏らす。

「悪い、私たちも少し外そう」

「お前らはしばらく談笑してな。おい、小日向借りるぞ」

「うん、未来？」

「うん、私もちよつと外すね」

すると今度は翼、クリス、未来の3人もまるで風を追うように席を外す。友奈と東郷は一体何かと首を傾げていたが、響と調、切歌は事情を知っているのでそれを静かに見送った。

フラワーの店先。

そこで風は静かにスマホの画面に視線を向け、深いため息をついていた。

スマホの画面にはこのようなメッセージが表示されている。

【差出人：大赦

宛先人：犬吠埼風

件名：勇者支援者着任に関するの報告

先日より予定されておりました勇者支援者の家系の者たち2名が犬吠埼風様の担当なされる地域に着任いたしました。

神託の日も近く、心してお役目に臨まれますようお伝えいたします。」

「勇者支援者……まさか……」

風はメールの内容を何度も目を通す。その内容は正直風にとって信じがたいものでもあった。

できることなら外れていてほしい、そう思っていたが、その予想は見事に当たるのであった。

「犬吠埼……」

「よおー！」

「翼……クリスマスも……」

風が人の気配を感じ振り返る。するとそこには翼とクリス、そして未来の3人が立っていた。

「まさか小日向……あんたも？」

「はい……黙っていましたけど」

「それじゃ……」

「ああ、アタシたちがその、支援者というやつだ」

風はそれを聞き今のメールの内容、その意味を完全に理解した。

最初から仕組まれていたのだ。こうなることが分かっていた彼らがこの時期に、この地域に来たのだという事を。

「聞くのは野暮かもだけど……どこまで知ってるの？」

「ほぼすべてだな。私の家……風鳴は大赦の中でも高い発言権を持つ。故に幼少の頃からこうなることを予見し、備えもしてきた」

「アタシの家……雪音も同じさ」

「私は一応ですけど、大赦で巫女をしていますから」

「そう……てことは響も——」

「いえ、響は関係ありません」

3人は皆険しい表情を浮かべながらも向かい合いそう言葉を交わす。

「響はただの幼馴染なだけです」

「その割には、結構詳しい話をあの子にもしてたようだったけど？」

それは所謂カマかけであった。一瞬そのことで驚く未来たちであったがすぐさまその表情を戻す。

「……………聞いていたんですね」

「聞こえてただけよ」

実は風は尾行している間ずっと翼たちの話を耳に入れていたのだ。普段大雑把で底抜けの明るさの少女である風だが、事こういうことに関しては人一倍神経をとがらせ気に掛ける性格でもある。

そうでなければ大赦が重要なお役目の責任者に抜擢するわけもない。

「アンタらが何を考えているかは知らないけれど、下手にうちの妹や部員たちを巻き込むのはやめてよね？」

「まだ、選ばれると決まってるわけじゃねえだろ？」

「それはそうだけどね……」

翼たちは風の態度からどうも風は大赦を信用していないいや、何か感情を押し殺しているかのような、そのように見えた。

まるでかつての自分たちのように……。

「しかし、いずれ分かる事でもある。そのときになったとき、何が起きてもいいように今のうちに覚悟は決めておいた方がいい」

「同感だな。今はアンタ一人の問題だが、もしそうなったらきつと、あいつらも関わらないままってわけにはいかなくなる……」

「覚悟ね……本当に選ばれるかわからないのに、どう覚悟しろって言うのよ？」

若干いらだったような口調になり風は翼たちにそう告げる。だが風も翼やクリスの言い分は理解できていた。

何せ事前に聞かされていたお役目の内容は、あまりにも過酷で残酷なものであり、実際にもし選ばれば翼たちが言う覚悟を決めなければいけないのだから。

「まあ、いずれ分かる事ではあるわね。もしそうならアタシもちゃんと向き合ってあの子たちに説明はするわ」

「そうか……なら今はこれ以上は、何も言わないでおこう」

風の返答に翼はそう一言だけ告げた。一方で風はそんな翼の態度に呆気を取られまじまじと彼女を見つめている。

「考えがあるのなら、それをいまさら私たちがとやかく言うものでもないだろう？ 実際には選ばれる保証もないのなら、無理に話し混乱させるべきではないからな」

翼はそれだけ告げるとクリスとともに再びフラワーの店内へと戻って行ってしまった。一体何が言いたかったのかと風はますますわからなくなりただその場に立ち尽くすばかりである。

「風先輩、私も翼さんたちと同じです。風先輩なりに考えがあるのなら、私も何も言いません。ただこれだけは言わせてください」

「何よ？ 改まって」

一方で1人残った未来は再び風に声をかけた。風は一回深呼吸し心を落ち着かせると未来の話に耳を傾ける。

「本当に大切なことを隠しているってことは、隠す方も、隠される方も辛いことです。だから、折を見て必ず話してあげてください。風先輩が今胸に秘めている大切なことを」

「未来……」

「昔、似たようなことを経験した……経験者の忠告です」

未来もそう告げるとフラワーへと戻っていった。

「全く……えらく扱いづらい後輩様だわ……」

一方で一人残った風はそう溜息交じりに言葉にしていた。

こうして、この世界に招かれた歌を奏でし戦士と神樹に選ばれし勇者が集った。

そして彼女たちは文字通り、この世界の命運をかけたお役目にその身を捧げることとなる。

その先に待つの果たして、輝かしい未来なのか将又。

残酷な現実と絶望なのか。

それはまだ誰にもわからない。

第1章7話 始まりの時

香川県讃州市内にある幼稚園。

そこでは現在勇者部の面々が園児たちへの催し物として人形劇を行っていた。

「やっとたどり着いたぞ魔王！ もう悪いことはやめるんだ！」
「わしを怖がって悪者扱いを始めたのは村人の方ではないか！」

人形劇の内容はよくある昔話の『勇者が魔王を退治する』といった感じのお話である。しかし今回勇者部の演じるそれは最終的には魔王を退治ではなく。

「だからと言って嫌がらせはよくない！ 話し合えばわかるよ！」
魔王を説得するというモノである。

これは主に友奈や響たちの提案で当初のモノからお話の内容が変わった結果でもあった。

ちなみに今回勇者役を担うのは友奈。魔王役は風である。
「改めてだが、魔王様を説得する終わりとは。あのバカたちらしい結末だな」

「ふっ、どのような者たちであろうとも手を差し伸べようとする。立花達らしいとは思わないか？」

「そりゃな。あのバカたちでなきや思い浮かばねえよそういうの」
劇の結末をめぐる勇者部でのやり取りを知っているからか、舞台裏でBGMを主に担当しているクリスと翼からはそのような言葉が漏れ出していた。

人形劇は佳境を迎え遂に結末へと向かっていたのだが。
ここでちよつとしたハプニングが勇者部面々を襲う。

「君を悪者には、しない!!」
友奈がそう台詞を言った時、つい演技に熱が入り過ぎたのか。

「あっ……………」
「お姉ちゃん……………」
「ドエライ事故デス……………」

友奈と風が人形劇に使っている張りぼてのステージを倒してし

まったのだ。

突然の、それも大失態と言えるような状況に慌てふためく友奈と風の2人。

「し……しまった〜」

「ど……どうしよ風先輩……」

幸いなのはあれだけ大きいにもかかわらず張りぼてが園児たちに当たらなかつたことだろうが。劇はもう完全にグダグダな状況になつてしまった。

「勇者キーツク!!」

「ちよ、おまつ! 話し合おうってきつき!」

どうにかこの状況を打開しようと友奈が突如風の演じる魔王に必殺の勇者キーツクをかます。

しかし、そんなことは勿論台本にはない完全なアドリブな上に、話の展開からしても支離滅裂な友奈の行動に風はすかさず突っ込む。

「話し合うはずがいつの間にか戦いに……」

「友奈ちゃん。せめて脚本に従つた内容にしてよ……」

「アハハ……」

突発的過ぎる友奈の行動にはさすがに響や未来、調など他の勇者部メンバーも溜息を零さずにはいられない。

「何がどうなつて……」

とはいえどうにか人形劇を完結させなければいけない。

劇自体はもう色々な意味でグダグダだが、幸いなことに園児たちは楽しんでる様子でもある。ここは友奈の作つた流れに乗るべきだろう。

「みんな、勇者を応援よ!」

東郷を中心に園児たちにそう呼びかけ突然のハプニングにどうにか対応。

「ぐわああああ、皆の声援が私の力を弱らせる〜」

「今だ、勇者パーンチ!!」

当初の結末からは大きく外れ、おまけに張りぼてステージが倒れ人形を操る友奈と風の姿があらわとなつている、最早人形劇ともいえない

い代物と化してしまったこの催しものを。

「というわけで、みんなの力で魔王は改心し祖国は守られました」

「みんなのおかげだよ」

どうにか最後までやり切ったのであった。

「よくもまああれで続けたもんだよな……」

「まあ、途中でやめるわけにもいかなかったしな……」

「とはいえ、こりやもう色々グツダグダじゃねえか……」

幸いなことは突然のハプニングこそあったものの、催し物それ自体は園児たちの大盛況で終わったという事だろう。

とはいえ、反省点ばかりの人形劇であるのは事実。後日勇者部では今回の劇に関してキツチリ反省会と再発防止に向けての対策を行うこととなったのであった。

香川県讃州市の丁度高台付近にある、西暦時代は観音寺中学と呼ばれていたこの中学こそ、現在結城友奈、立花響らが在籍する讃州中学である。

その中にある家庭科準備室というプレートの丁度真下に勇者部部屋と書かれたプレートが掲げられている。ここが友奈や響たちが属するこの学校の部活動の1つ、『勇者部』の部室であった。

「こんにちわ〜友奈及び東郷」

「響&未来&クリスちゃん、入りまーす！」

その部室の扉が勢いよく開けられ、5人の少女たちがそう元気に挨拶を行う。

直後に一人の、銀色とも形容できる色合いの髪の子がヒョコを思わせる髪型の少女に向かって何やらチョップをかました。

少女たちの名はそれぞれ。

赤毛で桜の花弁を思わせる髪飾りを付けた少女が結城友奈。

その友奈の押す車椅子に腰かけている黒髪の少女が東郷美森。

ヒヨコを思わせるような独特の茶髪の髪型の少女が立花響。

銀色の髪を細長いツインテールにしている少女が雪音クリス。

そして東郷と同じく黒髪だが白い大きなリボンを付けた少女が小日向未来である。

「へぶっ！」

「たく！ お前はなあ〜」

「痛いよクリスちゃん……」

「いくら部室に付いたからって挨拶にしては声がでかすぎだ!!」

どうやらそのクリスは教室内に入る寸前でのこの少女、立花響の挨拶時の声が大きかったことに腹を立てたらしい。

「お疲れ様です」

「相変わらずねクリスと響は」

「お疲れデース！」

「お疲れ様です」

「みんな、よく来たな」

響たちの姿に気づいたのかすでに部室内にいた部長の犬吠埼風と同学年の風鳴翼。

そして本年度、讃州中学の新生となり晴れて正式に勇者部に入部した風の妹の犬吠埼樹とその樹と同級生である暁切歌、月読調の5人も挨拶を返した。

「昨日の劇、大成功でしたね」

「おい、お前はアレを成功というのか!？」

「それはクリスに同意よ。何もかもギリギリだったわよ……むしろNG……」

「でも、みんなが喜んでくれたから、結果オーライですよ！」

「友奈ちゃんのアドリブで盛り上がりましたしね」

「無理を無理で押し通すとは、結城もやるものだ」

話題となったのは先日幼稚園で行った催し物の人形劇に関して。友奈や響は結果として園児たちが喜んでくれたという事で成功と口にしたが、正直な話し風やクリスの言うとおりの盛り上がりは結果的にであって人形劇として考えたらまごうことなき失敗と呼べるも

のであった。

「底抜けにポジティブですよね友奈さんは」

「ポジティブすぎるとは思うけど……」

「でもくよくよしてても始まらないデース。みんなが喜んでくれたのならそれで良かったってことデースよ」

それでも何事もポジティブにとらえる友奈の姿勢は他の勇者部メンバーからも評価されている。

「さて、気を取り直して、本日のミーティングを始めるわよ！」

一通り話し終わると風は今日の勇者部の活動内容を響、友奈たち勇者部全員に説明し始めた。

風が経つ背後の黒板にはかわいらしい子猫の写真が複数枚貼られている。

「未解決の飼い主探しの依頼。どっさり残ってるわ」

「こりゃまたずいぶんきたもんだな」

「大変そうなのデース」

それは勇者部がかねてから行っている子猫の飼い主探しの案件である。

先日の人形劇の練習やらセットの制作やらで滞っているうちにどっさりが増えてしまったのだ。

「ということ、今日から飼い主探しの強化月間にするわよ！　まずは東郷と未来！　ホームページの強化お願いね！」

「了解です！」

「PC以外でも携帯なんかからもアクセスできるように、モバイル版も作ります！」

風の指示を真っ先に受けたのが東郷と未来、この勇者部の実質頭脳ともいえる2人である。

東郷と未来はさっそく2人で勇者部のホームページに飼い主探しに関連したページの制作に取り掛かった。

「それじゃ、私たちはどうしようか」

「海岸とか神社とかにお掃除のお手伝いもよくいきますから」

「そこでもいろんな人たちにお願ひするデース！」

「それ、名案ですね」

「うん！ それじゃさうしようか！」

一方で響、調、切歌、樹、友奈の5人はよく清掃活動のお手伝いに行く海岸やら神社やらで飼い主になれそうな人たちに声掛けなどを行っていくことを決めたようである。

実際普段から顔見知りの人たちなどに助けを求めるといのはなかなか有効な手ではある。

「それじゃアタシらはどうする先輩？」

「うむ、ポスターなどを作って張り出すのはどうだろうか」

「それは名案っすね」

「うむ！ 猫のイラストを描いて張り出せば興味を持ってくれる者たちもいるかもしれん」

「まあ、その場合分かり辛いような現代アートまっしぐらな絵柄はご遠慮願いたいものですが」

「むっ!? どういう意味だ雪音！」

「さあね〜」

翼とクリスは子猫のポスターを制作し張り出すことを提案。この際クリスが何やら翼相手にポスターに描く子猫のイラストに関して何やら翼相手に口にしていたようだ。

「ホームページの強化終わりました！」

『はやつー！』

と、さうこう話している間に東郷と未来の2人はホームページの強化をあっさり終わらせてしまったようである。

「しかも見やすい！」

「東郷は兎も角、小日向もやるものだなあ……」

ものの十数分でホームページの強化を終えた東郷と未来の手腕に舌を巻く勇者部の面々であった。

讃州中学からそれほど遠くない位置にあるうどん処『かめや』。

勇者部部員たちもよく通う有名うどん屋の1つであり、味も絶品。

特に勇者部メンバーは皆、毎日の部活帰りに小腹がすいた時など足しげく通っている。

本来は異なる世界出身であった響たちもこの世界のうどんの味には慣れており部活帰り以外でもよく立ち寄るようになっていた。

「ハイお待ち!」

「おっし!」

「来た来たあ!」

「響、これで3杯目……」

「風先輩もですね……」

なお、これはもはや勇者部メンバーにとって毎度の事なのだが、風と響はかめやに來るとこのようにうどん、それも極めてポリユームーナ肉ぶっかけ、かなりの大盛りであるにもかかわらず最低3杯は食べる。

響は元の世界でもあの世界における響たち御用達のお好み焼き屋さん『フラワー』のおばちゃんから人の3倍食べると言われていたから未來たちは分かっていたが、風もそれに負けず劣らずの大食感であり、毎回の如く勇者部員たちを驚かせと気に呆れさせていた。

「うどんは女子力を上げるのよ!」

「そうそう! だから毎日3杯は当然です!!」

ちなみに当の本人たちはこう語っているものの、いつも大食いしてお腹をパンパンに膨れさせるそのさまを見てとても女子力が上がっているとは言えるものではないが、誰も突っ込むのも野暮だと口にはしない。

「あ、それはそうと。そろそろ文化祭の出し物決めないとね」

「はあ? まだ4月だろ!? 早すぎやしないか部長」

そんなこんなでおいしいうどんに舌鼓を打っている中、風がそのようなことを切り出した。クリスマスがそのことに疑問をぶつけるが、風曰く時期が迫ってバタバタし出すのもアレだから今からきちんとして決めておきたいとのことだった。

「結局、去年はバタバタしちゃって何も手を付けらんなかったからさ」「発足1年目だったのだから、無理もないさ」

「まあね、今年は猫の手が3つも入ったことだし、ちゃんとやりたいのよ」

そう言いつつ樹を撫で調や切歌たちへも視線を送る風。

理由を聞き一次ぼやいたクリスも風の真剣さが分かったのか静かになるほどと頷いていた。

「とはいえ、何がいいモノやら」

「できるなら一生の思い出になるものもいいよね」

「娯楽性とかのあるモノの方が、大衆も喜びますよね」

みんなもここにいる間に何かしらいいアイデアをと首をひねるが、中々良いアイデアは浮かばず。

「こりゃ、みんなの宿題ってところね。各自考えておくように」

結局、風がそう告げてこの場は解散となる。

「すみません、おかわりお願いしまーす！」

「あ、私ももう一杯！」

なお帰り際に風と響が4杯目を注文し、今一度他勇者部メンバーを呆れさせたのはまた別のお話。

すっかり空は茜色に染まり、亀屋の前には一台の軽ワゴン車が止まっていた。足の不自由な東郷が利用しているデイスービスの車であった。

友奈、東郷、響、未来の4人は家が同じ方向のため一緒に車に乗り込み、勇者部メンバーはここで解散となった。翼とクリス、調と切歌もそれぞれ別方向であるためしばらくは残った6人で歩いていたものの、しばらくして別れ現在はイツキと風の2人だけで帰路についている。

そんな中、風の携帯に1通のメールが届いた。

「……………」

そのメールの内容に怪訝な表情になる風。

「お姉ちゃん？」

そんな風の様子に心配になったのか、樹が声をかけてきた。

「ううん、何でもない」

慌てて平静を取り繕うも、やはり不安な様子は伝わっていたのか樹はじっと風の顔を見つめている。

「ねえ、樹……お姉ちゃんに隠し事があったら、どうする？」

「えっ!? えっと、よくわからないけど……」

「例えばね、甲州勝沼で援軍が来ないのに戦えーって言わなきゃいけないかったとして……」

「近藤勇？」

我ながら何を言っているのかと風は苦笑いを浮かべるが、実際はそんな冗談が通じるたぐいの話ではない。風が気にしていたのは先ほど形態に来たメールに関してのモノだったのだから。

しかし、内容が内容故に妹の樹は勿論、他の勇者部の面々にも話せることではなく、今は風一人がその胸の内に抱えていることでもあった。

「アハハ……何言ってるんだろう……ごめんね樹——」

「ついていくよ、何があっても。お姉ちゃんしか家族はいないんだし」

「樹……ありがとね」

今は何も言えない、しかし大切な妹のその言葉。それは少しだけ風の心を軽くした。

(そうそう、当たるものじゃないよね……)

できることなら、この日常がいつまでも続いてほしい。それが今、風が心の奥底で強く感じ、思っていたことでもあった。

しかし、運命はそんな少女たちの思いとは裏腹に巡ってくる。

少女たちがこの世界の現実直面するのは、そう遠い未来の事ではなかった。